

イエイツ研究



No.53・2022

日本イエイツ協会

日本イエイツ協会会則

1. 本会は日本イエイツ協会（The Yeats Society of Japan）と称する。
2. 本会はわが国におけるイエイツの研究の促進を目的とし、あわせて海外の研究者との密接な連絡および協力をはかる。本会は、この設立の趣旨に賛同する会員により構成される。
3. 本会は次の役員を設ける。
 - (1) 会長 1名
 - (2) 理事 若干名
4. 会長は理事会の推薦により定め、理事は会員の選挙により定める。
5. 理事会の推薦により顧問を置くことができる。
6. 役員の任期は2年とし、重任をさまたげない。
7. 理事会は会長をたすけ会務を行う。
8. 本会は次の事業を行う。
 - (1) 大会の開催
 - (2) 研究発表会、および講演会の開催
 - (3) 研究業績の刊行
 - (4) 学会誌の発行
9. 本会の経費は、会費その他の収入によって支弁する。
10. 本会の会費は年額7,000円とする。ただし、学生に限っては年額3,000円とする。
11. 本会に入会を希望する者は、申込書に会費をそえて申し込むこととする。
12. 本会は支部を置くことができる。
13. 本会則の変更は理事会の議を経て大会によって決定する。

— 目 次 —

講演

イエイツを追いかけて：アイルランド文学研究と国際交流	大野 光子	3
----------------------------------	-------	---

研究ノート

Music for Words から Words for Music へ	原田美知子	22
--	-------	----

シンポジウム報告：イエイツ詩の価値を問い直す：詩人と続く世代との対話を手がかりに —

全体の総括	西谷茉莉子	26
マクニースの <i>The Poetry of W. B. Yeats</i> から見るイエイツ詩	西谷茉莉子	29
「ともに食卓を囲むことの叶わぬ友人たち」		
— イエイツとヒーニーのエレジーをめぐる	中尾まさみ	32
イエイツを読むマーガレット・アトウッド	柿原 妙子	36
大衆文化の中のイエイツ詩：映画、音楽、マンガ、そしてジョーク	山内正太郎	40

口頭発表要旨

亡霊を呼び起こしたものは何か：『骨の夢』における若者の祈りについて	伊東 裕起	44
風の詩学：斬首における不在と表象のアボリア	石川 隆士	46

イエイツ研究関連書誌(2021 年 10 月～2022 年 9 月)	49
会計報告	57
2021 年第 57 回日本イエイツ協会年次大会プログラム	58
編集後記	59
投稿規定	61

イェイツを追いかけて—アイルランド文学研究と国際交流

大野光子

新型コロナウイルスによって想像を超える不確実性が世界中に浸透している最中、佐藤容子会長のご依頼により日本イエイツ協会大会の Zoom 講演をお引き受けしたものの、研究生活から引退した身で新規の学術的テーマは力不足と感じ、これまで私自身が関わったイエイツとアイルランド文学研究を国際交流という視点から振り返ってみた。

＜日本イエイツ協会会報「イエイツ没後50周年記念特集」と私＞

講演最初のスライド(図1)で示したのは出発点としての会報第21号(1991年発行)である。当時の会長大貫三郎先生が発行者で、「夜半油」氏による編集後記によれば、この号をもって会報が横組みに変えられている。変更の理由として、掲載論文が「英文と混在している」ことや「引用の自由度、国際化、ワードプロセッサの一般化など」があげられ、「抵抗のあるのを承知しながら」、「新しい中身を容れる器を」との考えから、「編集部の独断で横組みに」したと書かれている。イエイツ没後50年を機に、学会内でも当時全盛の「国際化」を視野に入れ、画期的な改変が行われたことがわかる。

日本イェイツ協会会報	
第21号	
— 目 次 —	
編集者 ヨウイダマツ 50 年記念	
論文	
1. 日本イェイツの「自己主張」を中心として……………山崎 隆二	1
2. 同様に「自己主張」を中心として……………山崎 隆二	12
3. "Among Stripped Children" は対人排斥……………大野 実	20
4. We Young and the Mass……………Hosaka Shunji	31
5. イェイツのシンポジウム——キリスト受洗劇……………中川 達夫	32
6. From Japan to the World……………中川 達夫	52
イェイツと我	
…大野 実……………大野 実	68
…大野 実……………大野 実	69
…大野 実……………大野 実	70
…大野 実……………大野 実	71
レゾナンス (イェイツと我)	
1. イェイツと「我」……………岡合	72
2. イェイツと「我」……………大野 実	74
3. イェイツと「我」……………大野 実	75
4. イェイツと「我」……………大野 実	76
5. イェイツと「我」……………大野 実	77
6. イェイツと「我」……………大野 実	78
7. イェイツと「我」……………大野 実	79
8. イェイツと「我」……………大野 実	80
9. イェイツと「我」……………大野 実	81
10. イェイツと「我」……………大野 実	82
レゾナンスと「我」……………大野 実	
11. イェイツと「我」……………大野 実	83
12. イェイツと「我」……………大野 実	84
13. イェイツと「我」……………大野 実	85
14. イェイツと「我」……………大野 実	86
15. イェイツと「我」……………大野 実	87
16. イェイツと「我」……………大野 実	88
17. イェイツと「我」……………大野 実	89
18. イェイツと「我」……………大野 実	90
19. イェイツと「我」……………大野 実	91
20. イェイツと「我」……………大野 実	92
21. イェイツと「我」……………大野 実	93
22. イェイツと「我」……………大野 実	94
23. イェイツと「我」……………大野 実	95
24. イェイツと「我」……………大野 実	96
25. イェイツと「我」……………大野 実	97
26. イェイツと「我」……………大野 実	98
27. イェイツと「我」……………大野 実	99
28. イェイツと「我」……………大野 実	100
29. イェイツと「我」……………大野 実	101
30. イェイツと「我」……………大野 実	102
31. イェイツと「我」……………大野 実	103
32. イェイツと「我」……………大野 実	104
33. イェイツと「我」……………大野 実	105
34. イェイツと「我」……………大野 実	106
35. イェイツと「我」……………大野 実	107
36. イェイツと「我」……………大野 実	108
37. イェイツと「我」……………大野 実	109
38. イェイツと「我」……………大野 実	110
39. イェイツと「我」……………大野 実	111
40. イェイツと「我」……………大野 実	112
41. イェイツと「我」……………大野 実	113
42. イェイツと「我」……………大野 実	114
43. イェイツと「我」……………大野 実	115
44. イェイツと「我」……………大野 実	116
45. イェイツと「我」……………大野 実	117
46. イェイツと「我」……………大野 実	118
47. イェイツと「我」……………大野 実	119
48. イェイツと「我」……………大野 実	120
49. イェイツと「我」……………大野 実	121
50. イェイツと「我」……………大野 実	122
51. イェイツと「我」……………大野 実	123
52. イェイツと「我」……………大野 実	124
53. イェイツと「我」……………大野 実	125
54. イェイツと「我」……………大野 実	126
55. イェイツと「我」……………大野 実	127
56. イェイツと「我」……………大野 実	128
57. イェイツと「我」……………大野 実	129
58. イェイツと「我」……………大野 実	130
59. イェイツと「我」……………大野 実	131
60. イェイツと「我」……………大野 実	132
61. イェイツと「我」……………大野 実	133
62. イェイツと「我」……………大野 実	134
63. イェイツと「我」……………大野 実	135
64. イェイツと「我」……………大野 実	136
65. イェイツと「我」……………大野 実	137
66. イェイツと「我」……………大野 実	138
67. イェイツと「我」……………大野 実	139
68. イェイツと「我」……………大野 実	140
69. イェイツと「我」……………大野 実	141
70. イェイツと「我」……………大野 実	142
71. イェイツと「我」……………大野 実	143
72. イェイツと「我」……………大野 実	144
73. イェイツと「我」……………大野 実	145
74. イェイツと「我」……………大野 実	146
75. イェイツと「我」……………大野 実	147
76. イェイツと「我」……………大野 実	148
77. イェイツと「我」……………大野 実	149
78. イェイツと「我」……………大野 実	150
79. イェイツと「我」……………大野 実	151
80. イェイツと「我」……………大野 実	152
81. イェイツと「我」……………大野 実	153
82. イェイツと「我」……………大野 実	154
83. イェイツと「我」……………大野 実	155
84. イェイツと「我」……………大野 実	156
85. イェイツと「我」……………大野 実	157
86. イェイツと「我」……………大野 実	158
87. イェイツと「我」……………大野 実	159
88. イェイツと「我」……………大野 実	160
89. イェイツと「我」……………大野 実	161
90. イェイツと「我」……………大野 実	162
91. イェイツと「我」……………大野 実	163
92. イェイツと「我」……………大野 実	164
93. イェイツと「我」……………大野 実	165
94. イェイツと「我」……………大野 実	166
95. イェイツと「我」……………大野 実	167
96. イェイツと「我」……………大野 実	168
97. イェイツと「我」……………大野 実	169
98. イェイツと「我」……………大野 実	170
99. イェイツと「我」……………大野 実	171
100. イェイツと「我」……………大野 実	172
101. イェイツと「我」……………大野 実	173
102. イェイツと「我」……………大野 実	174
103. イェイツと「我」……………大野 実	175
104. イェイツと「我」……………大野 実	176
105. イェイツと「我」……………大野 実	177
106. イェイツと「我」……………大野 実	178
107. イェイツと「我」……………大野 実	179
108. イェイツと「我」……………大野 実	180
109. イェイツと「我」……………大野 実	181
110. イェイツと「我」……………大野 実	182
111. イェイツと「我」……………大野 実	183
112. イェイツと「我」……………大野 実	184
113. イェイツと「我」……………大野 実	185
114. イェイツと「我」……………大野 実	186
115. イェイツと「我」……………大野 実	187
116. イェイツと「我」……………大野 実	188
117. イェイツと「我」……………大野 実	189
118. イェイツと「我」……………大野 実	190
119. イェイツと「我」……………大野 実	191
120. イェイツと「我」……………大野 実	192
121. イェイツと「我」……………大野 実	193
122. イェイツと「我」……………大野 実	194
123. イェイツと「我」……………大野 実	195
124. イェイツと「我」……………大野 実	196
125. イェイツと「我」……………大野 実	197
126. イェイツと「我」……………大野 実	198
127. イェイツと「我」……………大野 実	199
128. イェイツと「我」……………大野 実	200
129. イェイツと「我」……………大野 実	201
130. イェイツと「我」……………大野 実	202
131. イェイツと「我」……………大野 実	203
132. イェイツと「我」……………大野 実	204
133. イェイツと「我」……………大野 実	205
134. イェイツと「我」……………大野 実	206
135. イェイツと「我」……………大野 実	207
136. イェイツと「我」……………大野 実	208
137. イェイツと「我」……………大野 実	209
138. イェイツと「我」……………大野 実	210
139. イェイツと「我」……………大野 実	211
140. イェイツと「我」……………大野 実	212
141. イェイツと「我」……………大野 実	213
142. イェイツと「我」……………大野 実	214
143. イェイツと「我」……………大野 実	215
144. イェイツと「我」……………大野 実	216
145. イェイツと「我」……………大野 実	217
146. イェイツと「我」……………大野 実	218
147. イェイツと「我」……………大野 実	219
148. イェイツと「我」……………大野 実	220
149. イェイツと「我」……………大野 実	221
150. イェイツと「我」……………大野 実	222
151. イェイツと「我」……………大野 実	223
152. イェイツと「我」……………大野 実	224
153. イェイツと「我」……………大野 実	225
154. イェイツと「我」……………大野 実	226
155. イェイツと「我」……………大野 実	227
156. イェイツと「我」……………大野 実	228
157. イェイツと「我」……………大野 実	229
158. イェイツと「我」……………大野 実	230
159. イェイツと「我」……………大野 実	231
160. イェイツと「我」……………大野 実	232
161. イェイツと「我」……………大野 実	233
162. イェイツと「我」……………大野 実	234
163. イェイツと「我」……………大野 実	235
164. イェイツと「我」……………大野 実	236
165. イェイツと「我」……………大野 実	237
166. イェイツと「我」……………大野 実	238
167. イェイツと「我」……………大野 実	239
168. イェイツと「我」……………大野 実	240
169. イェイツと「我」……………大野 実	241
170. イェイツと「我」……………大野 実	242
171. イェイツと「我」……………大野 実	243
172. イェイツと「我」……………大野 実	244
173. イェイツと「我」……………大野 実	245
174. イェイツと「我」……………大野 実	246
175. イェイツと「我」……………大野 実	247
176. イェイツと「我」……………大野 実	248
177. イェイツと「我」……………大野 実	249
178. イェイツと「我」……………大野 実	250
179. イェイツと「我」……………大野 実	251
180. イェイツと「我」……………大野 実	252
181. イェイツと「我」……………大野 実	253
182. イェイツと「我」……………大野 実	254
183. イェイツと「我」……………大野 実	255
184. イェイツと「我」……………大野 実	256
185. イェイツと「我」……………大野 実	257
186. イェイツと「我」……………大野 実	258
187. イェイツと「我」……………大野 実	259
188. イェイツと「我」……………大野 実	260
189. イェイツと「我」……………大野 実	261
190. イェイツと「我」……………大野 実	262
191. イェイツと「我」……………大野 実	263
192. イェイツと「我」……………大野 実	264
193. イェイツと「我」……………大野 実	265
194. イェイツと「我」……………大野 実	266
195. イェイツと「我」……………大野 実	267
196. イェイツと「我」……………大野 実	268
197. イェイツと「我」……………大野 実	269
198. イェイツと「我」……………大野 実	270
199. イェイツと「我」……………大野 実	271
200. イェイツと「我」……………大野 実	272
201. イェイツと「我」……………大野 実	273
202. イェイツと「我」……………大野 実	274
203. イェイツと「我」……………大野 実	275
204. イェイツと「我」……………大野 実	276
205. イェイツと「我」……………大野 実	277
206. イェイツと「我」……………大野 実	278
207. イェイツと「我」……………大野 実	279
208. イェイツと「我」……………大野 実	280
209. イェイツと「我」……………大野 実	281
210. イェイツと「我」……………大野 実	282
211. イェイツと「我」……………大野 実	283
212. イェイツと「我」……………大野 実	284
213. イェイツと「我」……………大野 実	285
214. イェイツと「我」……………大野 実	286
215. イェイツと「我」……………大野 実	287
216. イェイツと「我」……………大野 実	288
217. イェイツと「我」……………大野 実	289
218. イェイツと「我」……………大野 実	290
219. イェイツと「我」……………大野 実	291
220. イェイツと「我」……………大野 実	292
221. イェイツと「我」……………大野 実	293
222. イェイツと「我」……………大野 実	294
223. イェイツと「我」……………大野 実	295
224. イェイツと「我」……………大野 実	296
225. イェイツと「我」……………大野 実	297
226. イェイツと「我」……………大野 実	298
227. イェイツと「我」……………大野 実	299
228. イェイツと「我」……………大野 実	300
229. イェイツと「我」……………大野 実	301
230. イェイツと「我」……………大野 実	302
231. イェイツと「我」……………大野 実	303
232. イェイツと「我」……………大野 実	304
233. イェイツと「我」……………大野 実	305
234. イェイツと「我」……………大野 実	306
235. イェイツと「我」……………大野 実	307
236. イェイツと「我」……………大野 実	308
237. イェイツと「我」……………大野 実	309
238. イェイツと「我」……………大野 実	310
239. イェイツと「我」……………大野 実	311
240. イェイツと「我」……………大野 実	312
241. イェイツと「我」……………大野 実	313
242. イェイツと「我」……………大野 実	314
243. イェイツと「我」……………大野 実	315
244. イェイツと「我」……………大野 実	316
245. イェイツと「我」……………大野 実	317
246. イェイツと「我」……………大野 実	318
247. イェイツと「我」……………大野 実	319
248. イェイツと「我」……………大野 実	320
249. イェイツと「我」……………大野 実	321
250. イェイツと「我」……………大野 実	322
251. イェイツと「我」……………大野 実	323
252. イェイツと「我」……………大野 実	324
253. イェイツと「我」……………大野 実	325
254. イェイツと「我」……………大野 実	326
255. イェイツと「我」……………大野 実	327
256. イェイツと「我」……………大野 実	328
257. イェイツと「我」……………大野 実	329
258. イェイツと「我」……………大野 実	330
259. イェイツと「我」……………大野 実	331
260. イェイツと「我」……………大野 実	332
261. イェイツと「我」……………大野 実	333
262. イェイツと「我」……………大野 実	334
263. イェイツと「我」……………大野 実	335
264. イェイツと「我」……………大野 実	336
265. イェイツと「我」……………大野 実	337
266. イェイツと「我」……………大野 実	338
267. イェイツと「我」……………大野 実	339
268. イェイツと「我」……………大野 実	340
269. イェイツと「我」……………大野 実	341
270. イェイツと「我」……………大野 実	342
271. イェイツと「我」……………大野 実	343
272. イェイツと「我」……………大野 実	344
273. イェイツと「我」……………大野 実	345
274. イェイツと「我」……………大野 実	346
275. イェイツと「我」……………大野 実	347
276. イェイツと「我」……………大野 実	348
277. イェイツと「我」……………大野 実	349
278. イェイツと「我」……………大野 実	350
279. イェイツと「我」……………大野 実	351
280. イェイツと「我」……………大野 実	352
281. イェイツと「我」……………大野 実	353
282. イェイツと「我」……………大野 実	354
283. イェイツと「我」……………大野 実	355
284. イェイツと「我」……………大野 実	356
285. イェイツと「我」……………大野 実	357
286. イェイツと「我」……………大野 実	358
287. イェイツと「我」……………大野 実	359
288. イェイツと「我」……………大野 実	360
289. イェイツと「我」……………大野 実	361
290. イェイツと「我」……………大野 実	362
291. イェイツと「我」……………大野 実	363
292. イェイツと「我」……………大野 実	364
293. イェイツと「我」……………大野 実	365
294. イェイツと「我」……………大野 実	366
295. イェイツと「我」……………大野 実	367
296. イェイツと「我」……………大野 実	368
297. イェイツと「我」……………大野 実	369
298. イェイツと「我」……………大野 実	370
299. イェイツと「我」……………大野 実	371
300. イェイツと「我」……………大野 実	372
301. イェイツと「我」……………大野 実	373
302. イェイツと「我」……………大野 実	374
303. イェイツと「我」……………大野 実	375
304. イェイツと「我」……………大野 実	376
305. イェイツと「我」……………大野 実	377
306. イェイツと「我」……………大野 実	378
307. イェイツと「我」……………大野 実	379
308. イェイツと「我」……………大野 実	380
309. イェイツと「我」……………大野 実	381
310. イェイツと「我」……………大野 実	382
311. イェイツと「我」……………大野 実	383
312. イェイツと「我」……………大野 実	384
313. イェイツと「我」……………大野 実	385
314. イェイツと「我」……………大野 実	386
315. イェイツと「我」……………大野 実	387
316. イェイツと「我」……………大野 実	388
317. イェイツと「我」……………大野 実	389
318. イェイツと「我」……………大野 実	390
319. イェイツと「我」……………大野 実	391
320. イェイツと「我」……………大野 実	392
321. イェイツと「我」……………大野 実	393
322. イェイツと「我」……………大野 実	394
323. イェイツと「我」……………大野 実	395
324. イェイツと「我」……………大野 実	396
325. イェイツと「我」……………大野 実	397
326. イェイツと「我」……………大野 実	398
327. イェイツと「我」……………大野 実	399
328. イェイツと「我」……………大野 実	400
329. イェイツと「我」……………大野 実	401
330. イェイツと「我」……………大野 実	402
331. イェイツと「我」……………大野 実	403
332. イェイツと「我」……………大野 実	404
333. イェイツと「我」……………大野 実	405
334. イェイツと「我」……………大野 実	406
335. イェイツと「我」……………大野 実	407
336. イェイツと「我」……………大野 実	408
337. イェイツと「我」……………大野 実	409
338. イェイツと「我」……………大野 実	410
339. イェイツと「我」……………大野 実	411
340. イェイツと「我」……………大野 実	412
341. イェイツと「我」……………大野 実	413
342. イェイツと「我」……………大野 実	414
343. イェイツと「我」……………大野 実	415
344. イェイツと「我」……………大野 実	416
345. イェイツと「我」……………大野 実	417
346. イェイツと「我」……………大野 実	418
347. イェイツと「我」……………大野 実	419
348. イェイツと「我」……………大野 実	420
349. イェイツと「我」……………大野 実	421
350. イェイツと「我」……………大野 実	422
351. イェイツと「我」……………大野 実	423
352. イェイツと「我」……………大野 実	424
353. イェイツと「我」……………大野 実	425
354. イェイツと「我」……………大野 実	426
355. イェ	

图 1

[illegible]

图 2

前年発行の第20号の縦組本文を図2で示したのは、講演原稿準備中に『イエイツ協会会報』は第15号（1984年）以後すべて協会ウェブサイトから閲覧できることに遅ればせながら気付いたからであり、事務局のご尽力に感謝し、引用して敬意を表すためである。

第21号の本文には、山崎弘行、風呂本武敏、大貫三郎、鈴木弘（英文）、中川浪子、富岡明美の各氏による投稿論文7篇67ページの他に、第25回大会の2つのシンポジウム＜イエイツと女性＞と＜Deirdre＞の報告が70ページ近くにわたって掲載されている。全168ページという記念号にふさわしい分厚さで、「新しい研究の時代の扉を押し開くことができればと思」うと書いておられる編集者の熱い想いが伝わってくる。また、この号には没後50年特集号にふさわしい懇切で貴重な「日本におけるイエイツ研究の動向（1）」を風呂本先生が執筆しておられるし、「イエイツと私」というミニ特集も組まれている。ただし、寄稿者が逢坂収、高橋雄四郎、渡辺淳子の3氏と私のみというささやかさは、なぜだったのだろう。「あれから30年」の今、目次に掲載された会員のうち何人かは鬼籍に入られ、あるいは学会に出席されなくなり、改めて長い年月であったことを実感させられる。今回講演の機会が私に与えられたのは、今も健康であるからこそと感謝しつつ、現在から見た「その後」をふりかえてみたい。

この特集の「イエイツと私」への私自身の寄稿をスタート地点とするため、その内容をここに再現すると、さらに25年遡った1966年に学部生対象の留学奨学金（サンケイスカラシップ）を得て奈良女子大学からアメリカ東部の大学へ留学したことに触れて、受講科目 English Literature の教科書の一冊であったアメリカ・マクミラン版 *The Collected Poems of W. B. Yeats* が「我が人生の一冊の書」となったと記している。今から思えば、50歳にも満たない年齢にしては大げさな言葉だが、それほどに当時イエイツとの縁を深いものと感じていたのは事実だった。アメリカから帰国、卒業、就職そして結婚し一児の母となった後に、文学研究を志して1972年に進学した名古屋大学大学院で、改めてイエイツと向き合うことができたからである。

T. S. エリオットやE. パウンド研究の第一人者であられた故安田章一郎教授は、初対面で「[子持ちの院生は]前例が無いが、それだけあなたが真剣に勉強したいということなのだから、ぜひ頑張りなさい!」と私を励ましてくださり、それがその後の長い年月心の支えとなった。安田先生のお導きで研究対象をイエイツに定め、先生の講義や演習を受講させていただき、なんとかイエイツ戯曲につい

での修士論文を提出できた。さらに修了後も、先生のご紹介により京都大学のイエイツ研究会や学会にも参加できるようになり、優れたイエイツ研究者たちとの出会いに恵まれたことも本当にありがたかった。

また、在外研究から戻られたばかりの故川崎寿彦助教授にご指導いただくことができたのも幸運だった。『庭のイングランド』等多くの著作で知られ、カミソリの刃とも評された厳しい研究姿勢とは裏腹に温和で包容力のある川崎先生の下で、英詩精読と批評理論を学んで英詩研究の基本を身につけ、文化論にも視野を広げることができた。現在の大学や研究環境をめぐる厳しい状況を見聞きするにつけ、1970年代の大学院が、さまざまな立場の院生たちに対して、修了後に大学教員として自律的な研究や教育を続けていくための基礎を提供する場として機能していたことを思い、改めて感謝しないではいられない。

<大会シンポジウム：イエイツと女性>

第25回大会は1989年9月に北海道教育大学の釧路分校で開催されたが、北海道という遠隔地で記念すべき大会が開催されるにあたり、故大浦幸男先生が「イエイツと女性」と題するシンポジウムの企画と司会をされた。先生は、『イエイツをめぐる女性たち』の著者であり、日本のイエイツ研究を牽引された功績によりダブリンのトリニティ大学から名誉博士号を授与された大先輩である。先生は会報のシンポジウム報告の中で、「若いころイエイツは、女性をしばしば理想化していたが、中年以後、現実派の詩人になってからは、どのように変わったか」との問題提起に続いて、「最近話題となってきたフェミニズムの問題が出てくる」と記しておられる。

企画段階の委員会では、「『イエイツとセックス』というようなことを、卓上にビールでも置いて、面白おかしくやってくれ、というような発言もあった」とも書いておられて、この企画がそのような発案からスタートしたと会場で聞いたときは、フェミニスト批評を担当した私は思わず耳を疑ったけれど、実際のシンポジウムは批評意識の高い会員たちと意見を交わす良い機会となった。シンポジウムの質疑応答において、「アイルランドの信仰にはマリア崇拜があるので、女性蔑視は無かった筈だ」との発言等も会場からあったと報告には記され、これに対し「マリア崇拜と女性蔑視の共存こそは、フェミニズムが発したキリスト教社会の問題点だ」との反論も示されている。

＜日本イエイツ協会と IASAIL-JAPAN＞

[illegible]

图 3

日本の空港到着から帰国便搭乗まで、ゲストは初めての日本で何の心配もなく旅を続けることができた。他方、世話をする若手会員の側でも高名な研究者や詩人・作家と親しく交流する機会が持て、Michael Longley 氏が谷川冬二先生に

詩を捧げた例のように、ゲストと会員の間に友情が育まれた例も少なくないといっている。これは、主に財政的な事情から生まれた苦肉の策だったようだが、長く両協会の事務局を担い支えてこられた委員の方たちの知恵と努力の賜物であろう。また、会員の立場から見れば、このような形で経験する国際交流も学会参加のメリットの一つであっただろう。2021年の東京オリンピックとパラリンピックの前宣伝に使われた「日本のおもてなし」は、はるか以前からアイルランドの作家や研究者の間では神話化されるほどすばらしかったようである。

IASAIL-Japan が佐野哲郎会長のもと初めて単独でホスト役を引き受けた世界大会は、1990年7月暑い盛りの京都で開催され、ポスターに「16カ国より S. ヒーニー他講師多数参加」とあるように、海外からも多数の参加者があって大成功であった。地味な学問世界のイベントとは思えないほど盛り沢山のプログラムで、それに向けて周到な事前準備をされ、会期中そして会期後まで素晴らしいリーダーシップを発揮されたのが、佐野会長と風呂本武敏事務局長であった。おふたりを敬愛する中堅そして若手の研究者たちが関西のみならず関東や中部からも京都に集結して、誰もが初めての経験ながら懸命に支えたことも忘れがたい。その開会式での佐野会長のスピーチも、JSTOR 経由 1991 年の *Harp* で読むことができる。



図4 京都大会ポスター



図5 *The Harp*

交通至便の大谷大学を会場とすることができたのは同大の多田稔教授のご尽力によるもので、会期中多い日には市外からの外部聴講者を含めて200人を超える学会参加者が集まったと記憶している。歴史的に見て、日本における大学の国際化が声高に語られるよりも早く、発足時から英語を学会公用語と定めた IASAIL-Japan によるこの京都大会は、国際学会の先駆けとして大きな意義のある大会だったと、今も信じている。

＜トリニティ大学での IASAIL 世界大会とシェイマス・ヒーニー氏＞

その2年後にダブリンの TCD で開催された IASAIL 世界大会では、前例のない数の日本人研究者が参加し研究発表を行った。京都大会の成功が日本の会員の世界大会での発表を大きく促したことを、現日本支部会長の Andrew Fitzsimons 先生は、*Irish University Review* 50.1 (2020) に掲載された論文の中で以下のように記している。

The effect of this conference was immediate and lasting: Japanese academic interest in Ireland increased and widened; at the International Conference held at Trinity College Dublin in 1992, thirty Japanese scholars attended, with thirteen presenting papers. Some of their topics showed Japanese interests moving beyond Yeats and Joyce: Charles Maturin, Lafcadio Hearn, Louis MacNeice, Jennifer Johnston, Nuala Ni Dhomhnaill and John McGahern.

この学会中に、京都大会に夫婦揃って参加された Seamus Heaney 氏と Marie 夫人が、京都での「おもてなし」への返礼として日本人会員たちを自宅でのカクテルパーティに招待してくださった。ダブリン市の中心部から電車に乗って Sandymount のヒーニー氏宅まで出かけた日本人は 15 名を超え、この日の「おもてなし」に示されたご夫妻の暖かいお人柄は、名声の極まった 1995 年ノーベル文学賞受賞以後も変わることはなかった。20 世紀初頭、イエイツは日本に招待されたものの来日を果たせなかったが、没後 50 年ともなると、このようにアイルランドから詩人や作家が来日するのは当たり前となり、文学研究と国際交流は切り離せない時代に入っていた。それを 2020 年春以来のコロナ禍が完全に妨げてきたのは、実に残念なことである。

2013 年夏、突然ヒーニー氏が他界されたとの悲報が世界を駆け巡った。国葬にも匹敵する盛大な葬儀がダブリンで行われたのち、亡骸は北アイルランドの故郷ベラーヒ村の教会墓地に埋葬され、その後、彼の死を悼みダブリンやニューヨーク等で追悼朗読会が開催された。日本でも、1987 年以来 4 度の来日で多くの思い出を残した詩人を偲んで、翌年春 4 月 10 日に東京の駐日アイルランド大使公邸で追悼朗読会が催され、わざわざ来日されたマリー夫人と子息の Christopher 氏、主催者の John Neary 駐日大使夫妻、そして少人数ながら故人と親しかった日愛の研究者、詩人、音楽家、外交関係者等が列席した。その中には、ヒーニー

氏と親しく、彼の詩の長年の愛読者であると公言しておられた美智子皇后陛下(当時)もおられ、各々が選んだヒーニー詩を朗読するしめやかな会は、文学を通じた日愛交流の幅広さと深さを示すものであった。

Celebrating Seamus Heaney

Part One	
House of Commons, July 14th	
John 1:17-18	For as I heard
Thomas (Henry Housley)	To Give Life
Michael (Angus)	Regarded
	The Hardest Men,
Timothy Barnes	Mid-Time Road
David (K. Thompson)	At the End
Paul (Andy)	At the Midpoint
Colin (Ben)	Ten Lenses
	Common Ground,
	Charges Raised, Math's
Tim (Angus)	To Indeed
	A King for Michael and Christopher
Michael (Michael)	Common to
	"Of one of the others."
	Common Ground, 10
	(The Skyline)
President Michael (D. Thompson)	From the Heights of Common
David (Andy (K. Thompson)	Produce in Peace (J. Thompson)
Part Two	
John 1:17-18	Ten to be Challenged
Thomas (Henry Housley)	Mid-Time Road
Michael (Angus)	Regarded

图 6

ダブリンの追悼会プログラム

Programme

Welcome
Andreasen Nooy

A Tribute to Seamus Heaney
Professor Mitsuko Ohno

Musical Interlude
Kazuo Toyota

Readings of Poems by Seamus Heaney

Reflections
Marie Heaney

Musical Interlude
Kazuo Toyota

Words of Appreciation
Fr. Donald Doyle S.J.

Afternoon Tea

图 7

東京の追悼会プログラム



图 8-1 & 2

教会墓地と墓碑 (2017 年夏)

＜女性学とアイルランド文学研究、そして大学の国際化＞

過去を振り返るこの機会に改めて確認できたのは、「イエイツ没後 50 年」という時期は私個人にとっても教育・研究者として大きな転換期だったことである。というのも、前後する時期に勤務先の愛知淑徳大学が大学院を新設し、さらに女子大から男女共学に移行した時期だったからだ。当時、地方私立大学の教員は国公立大学教員と比べ授業コマ数をはるかに多いのが一般的で、特に短大から発展し歴史の浅い愛知淑徳大学では、英文学科は数少ない教員たちが恒常的に定員オーバーの学生を抱えていた。30 代後半の「最若手」として、1983 年に前任大学からヘッドハントされた私は、常に雑用に追われた。幸いにも年長教員の理解

と協力を得て、赴任後まず Audio Visual Centre 設置を実現し、ゼミ制度の新設や卒業論文の必修化などの教育システム作りを進めていくことができたし、さらに大学院設置と拡充に向けて英国人教員の招聘・採用や日常の世話なども職務に入って、多忙ながらもいろいろ新しいことに挑戦することができた。

特に1986年の男女雇用等均等法施行後は、愛知淑徳大学でも数少ない女性教員たちが結束し、それまで個々で試行錯誤していた「女性学」を全学共通科目として導入することを計画し、私は女性学研究調査のため志願して夏休みをはさむ3ヶ月間北米の大学に出張した。この渡米で各地の大学で開講されていた Women's Studies や Feminist Studies について経験と知識を積むことができたのみならず、北米のアイルランド文学研究者との交流の輪も広げることができた。おかげで、IASAIL 京都大会で Women in Irish Literature をテーマとするシンポジウム企画を受け持っていた私は、アイルランドと米国からなんとかパネリストたちを集めることができた。そのパネリストのひとりであった Hofstra 大学 Maureen Murphy 教授が取り上げて論じられたのが、アイルランド語詩人 Nuala Ni Dhomhnaill であった。この未知の詩人の作品との衝撃的な出会いが、その後の私の研究方向に大きな影響を与えたことについては、改めて後で述べたい。

京都国際大会が成功裏に終わった後、突然佐野哲郎会長から呼び出しを受けた私は、IASAIL-Japan の次期事務局長として次の3年間支えて欲しいと依頼され、予想外のことに驚いた。しかし、大先生が私のような若輩者に期待を寄せてくださったことを心底ありがたく受け止め、とにかくお引き受けはしたものの、これは全く未知への挑戦と感ずる仕事となった。今から30年前の事務局の仕事はほとんどが紙と人手に頼るオールドファッションの作業で、事務局長就任後は、学会関係の段ボール箱の山と同居する研究室で、教員としての日常業務に加え、学会実務にニュースレター、学会誌や書籍の発送等の手作業や肉体労働にも追われた。それでも1990年に愛知淑徳大学から第一回大学院修士課程修了者が出ていたことが幸いとなり、アイルランド文学を専攻した山田久美子さんが学会会計を引き受けてくれ、後輩の河口和子さんや河合利江さんたちもさまざまな形で支えてくれたおかげで、3年後には次の風呂本武敏会長と井上千津子先生の事務局に無事引き継ぐことができた。

同じ時期、文科省の意向を受けて全国的に大学の「国際化」が進められていた。愛知淑徳大学でも1992年の留学生別科や国際交流会館の開設に合わせて事務部門としての国際部が新設されることになり、IASAIL-Japan 事務局長の役目を終

えたばかりの私は初代国際部長に任じられた。これにより、国際部を統括し留学生別科の学生リクルートと同時に英文学科生の留学先を確保するため、海外の大学との交流提携を推進することも新たな職務となった。英米の大学の他にアイルランドのコーク大学や北アイルランドのアルスター大学とも私自身が交渉にあたり、交流提携協定を結び、学生たちを短期研修や交換留学に送ることができたのは嬉しい仕事だった。

また、この時期には大学外の社会でも「国際化」と「男女共同参画」への動きが進められており、名古屋市でも女性政策先進国視察のため市民団派遣を計画し、女性リーダーとなるべき団員を公募することになった。愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所の開設委員でもあった私は視察団団長にとの委嘱を受け、1994年には英国に加えて女性政策推進中のアイルランドを視察、さらに翌1995年北京の世界女性会議にも団員たちとともに参加した。

この10年間はまさに日本中で「国際化」が奨励され推進された時代だったのだが、こうなると現実的に私自身は落ち着いて研究に取り組む時間は取れなくなってしまった。重なる職務をこなしていくためには、家事と育児で手抜きをすることと、睡眠時間を削ることしかない。幸いになんとか健康は維持できたが、それを受けいれ協力してくれた夫とふたりの娘たち、それにいざという時は助けに駆けつけてくれた亡き義母には、心から感謝した。後年、英国の大学で教えていた長女が出産育児問題に直面したとき、渡英して補佐するため私が早期退職を選んだのは、せめてもの罪滅ぼしと考えたからだ。

<ヌーラ・ニー・ゴーノルとの出会い>

そんな過剰労働の中で、1990年に起きたヌーラ・ニー・ゴーノルの詩との出会いは、私自身の心に切実なメッセージを直球で投げ込むようなインパクトがあって、運命的と感じられた。京都大会のシンポジウム会場でマーフィー先生の朗読されたアイルランド語原詩“Ceist na Teangan”とPaul Muldoonの英訳による“The Language Issue”を聴くだけでも強く心を動かされたが、発表後に「あなたのために」と先生がプレゼントしてくれた2か国語詩集 *Pharaoh's Daughter* (図9)を英訳で読み進むにつれ、どんどん彼女の詩の世界に魅せられていった。もともとイエイツの詩に魅力を感じて研究を志したが、現代女性読者としては彼の詩に登場する女性像に違和感を抱くこともある一方で、現代のフェミニスト詩人たちの作品にイエイツ詩ほどの魅力を感じない思いもあった。ところが、ニー・ゴー

ノルの詩には、英語訳で読むかぎり、詩としての力と現代女性の意識が見事に共存しており、こんなに魅力的な詩を書ける詩人なら研究してみたいと感じたのである。

Ceist na Teangan

Nuala Ni Dhomhnaill

Cuirim mo dhóchas ar snámh
i mbáidín teangan
faoi mar a leagfá naíonán
i gcliabhán
a bheadh fite fuaite
de dhuilleoga feileastraim
is bitiúman agus pic
bheith cuimilte lena thóin

The Language Issue

Paul Muldoon

I place my hope on the water
in this little boat
of the language, the way a body might put
an infant
in a basket of intertwined
iris leaves,
its underside proofed
with bitumen and pitch,

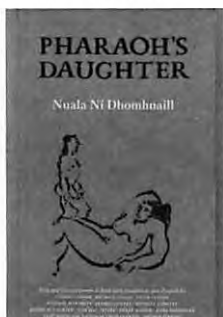


図 9

先に触れた 1992 年トリニティ大学の IASAIL 大会に関するフィッツサイモンズ先生の文章中で、ニー・ゴーノルの詩を取り上げて論じた日本人発表者とは私のことである。研究発表しようと心に決めた途端、見えない縁が大会まで私の背を押してくれた。まず前年に名古屋に住むアイルランド人の友人が、「学会では、引用する詩をアイルランド語で朗読する努力をしなくてはダメ」と主張し、わざわざ原詩朗読テープを本国から取り寄せてくれたし、学会前に彼の家族が私をダブリン空港まで出迎えて事前練習の場すら用意してくれていた。実は、テープ録音とトレーナー役を担ってくれた女性はニー・ゴーノルの知人で、会場まで私の

発表を聴きに来てくれたうえで本人に好意的な報告をしてくれたため、詩人から会いたいという伝言が翌日学会場に届いた。こうしたさまざまな縁に導かれ、京都大会で作品と出会った2年後に、詩人と私は出会うことができたのだった。

＜アイルランド語詩の研究と翻訳＞

研究者が原作者に直接会って情報を得ることは、学問の王道とは言えないのかも知れない。過去の作家の場合、テキスト分析や、資料や周辺情報を集約して論ずる以外に方法は無いので、研究と呼ぶにふさわしい蓄積が求められる。しかし、ヌーラ・ニー・ゴーノルの場合、作品が注目され始めたばかりで研究書の類はまだ刊行されておらず、かつ彼女の詩がアイルランド語で書かれている以上、原語で読解できない私にはすぐには取り組む術も無かった。それに、そもそも詩というジャンルは外国語の初心者が理解し解釈するにはハードルが高すぎると、私は既にイエイツで十分痛感していた。他方で、詩人と私が共通語である英語でコミュニケーションをとることに問題はなかったのも、直接会って話ができるのは本当にありがたいことだった。

いざ出会ってみると、予想通り、同じ時代を生きるほとんど同世代の女性同士として、共感するところが多く、ヌーラさんと私はすぐさま打ち解けて話し合うことのできる友人となった。当時、学会等で彼女の詩が取り上げられる時、英語訳はアイルランド語の原詩とどれほどの差異があるかとか、翻訳はむしろ原作者の存在を消してしまうのみならず原詩の価値を損なっているといった類の言語イデオロギー的な問題提起がされていたが、それは当時のアイルランド語の存続をめぐる悲観論や、厳しい論争を反映していたからだろう。しかし、彼女の詩“Geasa / Bond”や、正に言語論争そのものを取り上げた“Ceist na Teangan / The Language Issue”は、翻訳をめぐる議論を超える切実さと、明るい強さがあると、私には思われた。加えて、図9の表紙絵の元となっている“Fear / Looking at a Man”や“Claoninsint / The Word on the Wind”など、女性ならではのユーモアとエロティシズムが散りばめられた秀逸な詩も大いに楽しめた。アイルランド社会と言語の問題への理解が進むにつれ、今を生きる彼女の声を日本の読者に届けたいという思いは強くなっていった。

親しくなった後にヌーラさんから聴かされたのは、アイルランド語話者として育ち、英語を含めた多言語話者となっている自身の詩を、自ら英訳するのでは満足できないという思いがけない告白だった。英語詩人としての力不足を率直に認

めている言葉とも思われるが、実は、彼女は十代で詩を書き始めた当初、英語で書いた自作詩に満足できず、自分はアイルランド語で書くほうがずっと良い詩が書けるという発見をし、それに徹してきたのだという。他方で、彼女の詩の英語翻訳者たる詩人たちはごく少数を除きアイルランド語を十分理解しないので、2カ国語詩集 *Pharaoh's Daughter* は、彼女自身が英訳用メモを用意して翻訳者に渡し、自由な発想により訳された詩集になったとも教えられた。つまり同書は、訳者たちが優れた詩人であるからこそ、原詩に翻訳で挑戦するという形のコラボレーションとなり、成功したというのである。

これは、通常不可能とされる「詩の原典に忠実な翻訳」をそもそもの前提としない、という翻訳姿勢であり、「コラボレーションとしての翻訳」を主張するものだ。翻訳自体の是非を問うよりも、元の詩が言語を超えて外の社会に伝わることを優先する姿勢とも言える。それならば、アイルランド語を解さない私の日本語への翻訳という挑戦も、原作者とのコラボレーションによって二重翻訳という批判を避けることができるのではないか。つまり、ヌーラさんの詩を日本の読者に届けるために、原作者と翻訳者との英語を介したコラボレーションを行えば、より原作に近づけることができるはずだと発想したのである。そんな挑戦に共に取り組むことにヌーラさんも同意してくれ、詩人と翻訳者との共同作業は、ふたりの都合の合う時にアイルランド、日本、アメリカと場所を変えながら、幾度となく重ねられた。

一方で私は、これは自分自身の内なるふたつの立場、すなわち研究者と翻訳者としてのコラボレーションでもあると考えていた。研究に裏付けられた翻訳でありながら、学者以外の一般の読者にも手にとって読んでもらいたい。そのために日本語訳を磨き上げ、人々が読みたいと感じるような詩集を作りあげたいと心から願った。幸いなことに、佐野先生や日本詩学会の故清水博之先生、故松田誠思先生他の先輩から励ましと協力をいただきながら翻訳作業を進めることができ、1994年夏には私家版3ヶ国語詩集『ケルトの声を運ぶ船』（図10）刊行と、それに合わせたヌーラさんの初来日が実現した。そして、関東学院大学ポエトリー関東の招待による彼女の二度目の来日で、偶然出会うことのできた詩人高橋睦郎氏と佐々木幹郎氏の強力な支援と、音楽業界の友人たちの助けによって、2001年にはついに思潮社より日愛2ヶ国語、朗読CD付きの詩集『ファラオの娘 ヌーラ・ニー・ゴーノル詩集』（図11）を刊行することができた。これに合わせ、秋に東京で開催された出版記念朗読コンサート（図12）ではホールが満員となり、

終演後にはサインを求めて大勢の観客が並んだ。この年、新年から私は博士論文執筆と翻訳詩集出版とが重なる中、アイルランドにも短期出張し、文字通り綱渡りの日々が続いたが、多くの方たちに助けられたおかげで乗り越えることができ、本当にありがたかった。



図10



図11



図12

＜イエイツを追いかける旅と国際サマースクール＞

本題であるイエイツを追いかける旅に戻ると、人生で初めて私がアイルランドの土を踏んだのは1981年、ちょうど今から40年前のことで、その時は1週間で憧れのダブリン、スライゴー、ゴールウェイを慌ただしく駆け抜けただけだった。2度目は1990年、IASAIL 京都大会直後の8月に、念願だったスライゴーの国際イエイツ・サマースクールに受講生として1週間参加し、高名な講師陣や充実したセミナーに感激した。

そのサマースクールに講師として招かれることになったのは、驚き以外にない展開だった。1996年秋に日本イエイツ協会のゲストとして招聘された米国 Emory 大学教授 Ronald Schuchard 先生が、面識のなかった私をわざわざ学会の懇親会で探して話しかけてくださり、しばし雑談の後に、「来年自分がイエイツ・サマースクールのディレクターを務めることになっているのだが、講師陣に加わってくれないか」と依頼されたのだ。他の講師の中に私を推薦する人があったので、直接本人に会った上で決めようと思っていたとのことだった。突然のことで、推薦者とシューハート先生の期待に応えて講師の責任を果たせるだろうかと内心迷いはしたものの、その場でお引受けし、翌年の夏スライゴーへと向かった。(図13、14)

日本からの講師がレクチャーの題目に選ぶとすれば「イエイツと能」が適切なのかも知れないと思いつつも、私は「演劇」の発展型としての「映画」をテーマ

に選ぶことに決めた。というのも、当時愛知淑徳大学と北アイルランドのアルスター大学が国際共同研究 International Media Studies の企画を進めており、私はアルスター大学大学院修士課程兼任教授として英語でメディア科目を教える担当だったからである(1997, 98, 99 年度科研費国際学術研究—大学間協力研究)。ちょうど John B. Kean の作品を Jim Sheridan 監督が映画化した *The Field* におけるイエイツの影響について考えていたところだったので、翌年までにこれを論文にまとめ、レクチャーとしてスライゴーで披露した。

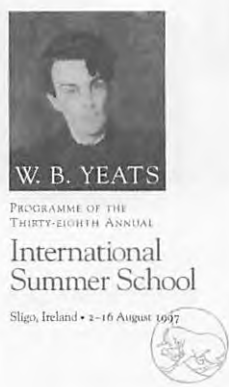


図 13

Wednesday 13	
9:30 A.M.	Professor Barbara Hardy, Birkbeck College, University of London <i>The Tower</i>
11:15 A.M.	Professor Nicholas Grene, Trinity College, Dublin <i>"Yeats and Dates"</i>
1:00 P.M.	Tour of Rosses Point and visit to Lissadell House (£2); students should bring packed lunches.
5:00 P.M.	Seminars
10:00 P.M.	Social Centre
Thursday 14	
9:30 A.M.	Professor Patrick J. Keane, Le Moyne College, New York <i>The Winding Stair and Other Poems</i>
11:15 A.M.	Professor Mitsuko Ohno, Aichi Shukutoku University, Japan <i>"Yeats and Film: The Visionary Relation"</i>

図 14

“Yeats and Film: The Visionary Relation”と題した講演の内容についてここでは触れないが、驚いたことに、講演直後に会場でスクール関係者が紹介してくれた男性が「自分はジョン・B・キーン弟だが」と話し始めた。「あの映画は原作とあまりにかけ離れているので、原作者への敬意に欠けると不満に思っていた。今でもその気持ちは残っているが、あなたの講演はなるほどそうかと思わせてくれたよ」と率直な感想を伝えてくれ、聴衆の中にそのような人物がいようとは予想だにしなかった私は、スライゴーで講演することの怖さと楽しさを同時に味わった。幸いにも私の講演は評判が良かったようで、地元イエイツ協会からの要望によって 2001 年にふたたび講師として招聘されたのは、とても嬉しかった。

その後スクールに Academic Board が正式に設置されることになったとき、日本との架け橋の役割を期待されてか、歴代のディレクターや高名な先生たちとともに私も委員に加えられた。そこで、他の委員に対して早速私は佐野哲郎先生を講師に推薦した。日本におけるイエイツ研究を長年にわたり牽引してこられた佐野先生のご講演を、スライゴーに集う人々にも聴いてもらいたいと以前から考えていたからである。そして、2006 年には地元の方たちに大評判となった佐野先

生の「イエイツとラフカディオ・ハーン」の講演が実現し、地元のイエイツ協会会長は感動のあまりスタンディング・オベーションをされた。図15は委員リスト、図16は講演会場 Hawk's Well Theatre 前での佐野先生と私である。2012年にサマースクール講師の役目を中尾まさみ IASIL Japan 会長（当時）にバトンタッチするまでに、私自身は講演を合計5回とセミナー指導4回を担当し、国際イエイツ・サマースクールから引退した。



図 15



図 16

＜イエイツで繋がる縁＞

しかし、スライゴーで親しく交流したアイルランドや英米のイエイツ研究者や詩人たちのご縁はそれからも続いた。ハーバード大学の Helen Vendler 先生やトロント大学の Ann Saddlemyer 先生が、スクールの聴衆に混じって初めて私の講演を聞いてくださった時は大変緊張したが、その後先生たちはいつも打ち解けて話せる友人として接してくださった。ボストン大学の Marjorie Howes 先生は、日本イエイツ協会事務局からゲストとしてお招きする橋渡しを頼まれて2007年に実現したし、Notre Dame 大学教授の Luke Gibbons 先生と詩人でオックスフォード大学教授の Bernard O'Donoghue 先生は IASIL Japan のゲストスピーカーとしてそれぞれ2007年と2008年に来日された。

また、リムリック大学の Margaret Mills Harper 先生の初来日の折に、彼女を中心とする国際イエイツ協会発足準備中の研究者たちから日本イエイツ協会に繋いで欲しいとの要請があることを知らされ、当時の会長であった奥田良二先生や佐藤容子先生に検討をお願いした。やがて、ハーバー先生たちによって結成された国際イエイツ協会と日本イエイツ協会が合同で主催する「2018年国際シンポジウム」が、京都大学を会場として開催された。私も会場に出向き、1990年にIASAIL 京都大会を成功させた先輩たちのレガシーを受け継ぎ、若い世代の池田

寛子先生、眞鍋晶子先生たちがイエイツ研究の国際的な連携のため事務局として頑張っておられる姿を拝見して、とても感動した。

< IASAIL-Japan から IASIL Japan へ >

時間を少し戻して、日本におけるアイルランド文学研究のもう一つの車輪である IASAIL Japan は、1997 年に本部が学会名称を IASIL (International Association for the Study of Irish Literatures) に変更したのに合わせて、IASIL Japan となった。これは、アイルランド文学の多様性を認めるものとして好意的に捉えられたし、2001 年には、松村賢一会長のもと学会誌も一層学術的な論文集とすべく、*Harp* から *Journal of Irish Studies* に改名された分厚い Vol. XVI が、Peter MacMillan 編集長による “a refereed journal” との言葉を掲げて発行された。

この頃になると IASAIL Japan 第一世代の会員が次々と引退される一方、若い世代の研究者の活躍が目覚ましくなったのは喜ばしいことだったが、佐野哲郎先生からまたもや私にお声がかかった。それは、世代交代の狭間となる時期に第一世代最後のひとりとして会長役を引き受け、学会を持続発展させるため頑張りたいとの要請だった。2005 年の大会 AGM で正式にお引き受けしたが、翌年就任したところ、当時の学会には危機的な財政の立て直しを始め多くの課題があり、解決が求められていると知った。幸いにも、非常に有能な事務局長の下楠昌哉先生と会計の佐久間志帆先生をはじめ、委員の先生方の力強いお支えのおかげで、これらを克服できたうえ、IASIL Japan は日本学術会議協力学術研究団体にも指定された。

また同時期に、JSTOR との交渉により、IASIL Japan は既刊の *Harp* も含めた学会誌 *Journal of Irish Studies* 全号を無料でデジタル化してもらい、後は掲載論文を有償で利用者にオンライン提供するとの方針が決まった。これは、収益を学会収入とするという画期的な契約だったが、私の任期内に初動を開始し、編集長であった Beverley Curran 先生他の委員の忍耐強い交渉のおかげで推進し実現できたことは、日本におけるアイルランド文学研究の国際化に不可欠なステップであったと自負している。

日本イエイツ協会も IASIL Japan もコロナ禍に翻弄され、昨年来大会開催等ができずにいるのは誠に残念だが、現会長や事務局を担う若い研究者の方たちのおかげで確実に活動が継続されており、コロナ後には一層発展するものと確信している。

余談ながら、今日では日本イエイツ協会も IASIL Japan も美しく効率の良いウェブサイトを持っており、クリック一つで有効活用ができるようにされているが、30 年前の会報 21 号「あとがき」には「ワードプロセッサの一般化」と言う言葉があったのだ。今の若い人たちは見た記憶すらないかも知れないワープロとコピー機とファックスの時代から、今日のスマートフォンにいたるまで、情報処理用の機器もスタイルも急激に目覚ましい進化を遂げたことに、改めて感嘆せざるを得ない。それとともに資料収集や通信方法も大きく変化したことから、文学研究者も今ではこの分野での知識と十分なスキルが要求されることを痛感しているし、今回は大量の蔵書を断捨離してしまった引退者としてデジタル資料に本当に助けられた。

<イエイツと現代アイルランド文学を追いかけて、その後>

会報 21 号以後の 30 年間、私なりに続けてきた「イエイツ研究」はまことに不十分だったと反省はしているが、個人的事情や時代動向の中で、周囲の協力を得ながら精一杯努力してきたので、後悔はない。しかし、研究者かつ翻訳者として活字化した仕事の責任と喜びを、後になって感じる事態が生じたため、もう少し話を続けたい。

すでに述べたように、ヌーラさんがポエトリ関東に招待されて 2 度目の来日をした時、朗読を聞いた高橋睦郎さんと佐々木幹郎さんが詩集刊行への協力を申し出てくださったことが、翌年以後おふたりの Poetry Ireland 招聘による 3 回の朗読ツアーに繋がった。そして、榎本伸明先生も同行のこれらの旅からは、高橋睦郎英訳詩集 *On Two Shores* (2006 年) と佐々木幹郎英訳詩集 *Sky Navigation Homeward* (2019 年) が生まれた。

外国語からの翻訳詩は訳語を磨き詩の完成度を高めなければ読者を得られないと、私は『ファラオの娘』出版の経験から実感していたので、英訳詩集にはまずコラボレーションの相手を見つけることが重要だった。幸い、*On Two Shores* は優れた研究・翻訳者であるアルスター大学の Frank Sewell 先生が私の思いに共感してくれ、数年がかりで共訳作業を重ねた後、原稿が完成した。アイルランドでは前例のない日本人詩人の英訳詩集原稿を引き受けてくれたのが、詩集出版の老舗 Dedalus Press であったことは、本当に幸運だった。ダブリンでの盛大な出版記念朗読会には、詩集の解説を書いた榎本先生、詩人の四元康裕さんに加え、スーウェルさんも駆けつけて英訳を朗読してくれた。

また、当日参加できないからと、ヒーニーさんご夫妻が私たち一行を自宅に招いて私的な朗読会を開いてくださったのだが、その折の写真（図 17 榎木伸明氏撮影）にはおふたりの詩のエネルギーに満ちた楽しい時間が切り取られているようだ。後に、高橋睦郎さんが文化功労賞を受け、芸術院会員に選出され、さらに駐日アイルランド大使館と IASIL Japan が創設したシェイマス・ヒーニー賞の第一回受賞者に選ばれたことも、私にとって嬉しい後日譚となった。

高橋さんは日本を代表する詩人であるが、アイルランドでは無名だった日本語詩人の英訳詩集を刊行できたのは、日愛米の友人たちが私を励まし支えてくれたおかげだった。その 13 年後に、ベヴァリー・カレン先生と共訳し、榎木先生が再び解説を書いた佐々木幹郎英訳詩集 *Sky Navigation Homeward* を苦勞無く出版できたのも、高橋詩集の評価が高かったからだと後に聞かされた。佐々木さんはゴールウェイの Cúirt2019 文学祭に招待され、劇場での出版記念朗読会は大好評だったし、ダブリンでの朗読会場 Poetry Ireland では聴衆の中に駐アイルランド日本大使や日愛の古い友人たちの顔があったのも心強く、とても嬉しいことだった（図 18）。



図 17



図 18

他方で、日本語訳詩集『ファラオの娘』もさまざまな反響を生んだ。ヴィジュアル・アーティストの大坪美穂さんはヌーラさんの詩から強いインスピレーションを得て作品を制作し、「詩の言語を新たな芸術表現へと再生する」試みに次々と取り組んできた。2008 年には高知県香美市立美術館でヌーラさんの“Immram”詩集をモチーフとした大規模展「海界」（図 19）が開催されたし、欧州文化首都 Galway2020 芸術祭にも招待された。残念なことに、これがコロナ禍のため中止されたため、彼女と私は Arts Transcreation Ireland-Japan を結成し、制作したビデオを予定の時期にオンラインで配信した。幸いにも、翌 2021 年 12 月に改めてゴールウェイ大学招聘 EU-Japan Fest 委員会後援により大坪・大野チームが現地に赴き、Galway Arts Centre で Miho Ohtsubo: *Black Milk Family Portrait* 展が開催されることとなった。

さらに、ヌーラさんの詩は女性津軽三味線奏者である二代目高橋竹山さんの心にも響いた(図 20)。東北大震災後に佐々木幹郎さんの紹介で知り合った竹山さんから依頼を受け、私が参画した渋谷のライブ・シリーズからは、竹山さんと小田朋美さんの作曲演奏による「ファラオの娘」、「みんなが言った」、「病院の人魚」他の曲が誕生した。津軽三味線とピアノの伴奏で、「わたしは希望を水に託す／この言葉の小舟に乗せて／・・・／ことによると 漂う先は／ファラオの娘の膝の上」と歌う「ファラオの娘」は、今では竹山さんのコンサートのレパートリーとなっている。



図 19



図 20

<おわりに>

今回このような振り返りの機会を与えられて再確認したのは、イエイツを追いかけた私のアイルランド文学研究は国際交流と詩の翻訳があつてこそ成立したということであった。それに、イエイツ没後 50 周年大会の舞台だった釧路が、4 年前から私たち夫婦の夏の居住地となっている縁の不思議にも驚いている。初めての夏、釧路の人々との交流で天然記念物「まりも」の生態を伝えるすばらしい絵本「わたしはマリモ」に出会い、英訳ボランティアを買って出たところ、翌 2019 年には 2 か国語絵本 *I am Marimo* が出版された。それが 2 年後の夏には小中高校生たちによる英語朗読大会に発展し、そのうえ釧路の町にアイルランド研究会まで誕生したのは、新たな喜びである。

コロナ禍の中でも根気強い研究を続けておられる研究者各位には心からの敬意を表しつつ、私自身は人生 100 年時代と言われる今、アイルランド文学を通した国際交流にエネルギーを使う余生も良いと考えている。

最後に、アイルランド文学研究を通してお付き合いくださった大勢の皆さまに感謝を表し、日本イエイツ協会の末長い発展を心より願っている。

Music for Words から Words for Music へ

原 田 美知子

「言葉」と「音楽」を一つにしたいという再びの願望をもとに 1930 年代に数多く書かれた W. B. Yeats のバラッドを読んでいくと、「言葉」と「音楽」の関係性が以前とは微妙に変化しているのに気付く。長年、彼にとって「音楽」はあくまで「言葉」に従属すべきものだった。音楽家は詩人の指図に従うべきだと彼は考えていた。¹しかし、ここにきて、言葉と音楽がまったくイコールとまではいかないまでも、かなり等しい割合で語られようとしている。その変化の背後にあるのは、歌われる時と場合によって歌詞が異なることが当たり前の民衆のバラッドの融通性、時代を生き残る生命力を、イエイツが再認識したからではないだろうか。それが証拠に、イエイツの手になる晩年のバラッドや歌、具体的には “Three Songs to the Same Tune”、 “Alternative Song for the Severed Head in *The King of the Great Clock Tower*”、 “Two Songs Rewritten for the Tune’s Sake”、 “Three Songs to the Same Tune” の替え歌の “Three Marching Songs” などと同じ節で歌われる異なる歌詞として書かれ、発表されている。 *Broadsides* (1935) の前書きには、次のようにある。

To the country singer the words are more important than the music, he will sing different poems to the same tune... All Gaelic poems, or all but a few modern exceptions, were written to some tune, whatever tune came to mind perhaps; the words themselves had sufficient novelty.²

(下線は筆者、以下同様)

これまで「音楽」と「言葉」を一つにしたいと願いながら、イエイツにとっては「言葉」がいつも一番であった。しかし、今、自信をもって、この二つを融合させられるのではないかと考えている。大事なものは、人々によく知られたメロディに乗せて異なる唄、詩を歌うことである。曲が馴染みのものであればあるほど、聴く人は言葉に注意を向ける。悪名高い青シャツ党の行進曲のために書いた

“Three Songs to the Same Tune”(1934)はそのよい例である。青シャツ党は、アイルランドの伝統歌“O'Donnell Abu”のメロディを自分たちのテーマ曲として採用し、歌詞を募った。イエイツは友人のアーネスト・ブライスの要請を受け歌詞を書くが、結果は落選。³しかし、翌年にかけて第二歌、第三歌の歌詞も書き加えて“Three Songs to the Same Tune”として発表した。

“Three Songs to the Same Tune”の特に第一歌は、青シャツ党のために書かれた詩として“notorious”という形容詞をつけて論じられることが多い。しかし、そのような政治的なことよりもむしろ、このバラッドが面白いと思うのは、第二歌で、イエイツの家で飼っていためんどりがいなくなったとき、妻のジョージが隣家のコリー犬が犯人だと思い込んでメモを庭師に持たせると、すぐに「コリーを処分した」という青シャツ党員である隣人からの返事が来たというエピソード⁴がリフレインに組み込まれているところである。

Those fanatics all that we do would undo;

Down the fanatic, down the clown;

Down, down, hammer them down,

Down to the tune of O'Donnell Abu. (第一歌のリフレイン)

'Drown all the dogs,' said the fierce young woman,

'They killed my goose and a cat.

Drown, drown in the water-butt,

Drown all the dogs,' said the fierce young woman. (第二歌のリフレイン)

深刻な動作、重い動きを感じさせる D 音が冒頭にくる単語を共に繰り返しながら、物騒な第一歌のリフレインと物騒だけれどもコミカルな第二歌のリフレインは、「気性の激しさ」という点では共通している。逆にリフレイン以外のところは第二歌の方が荘重な内容になっていて、これも第一歌あつての相乗効果が感じられる。そして、第三歌では“Time for us all to pick out a good tune”「よいメロディを選んで」「lift up the song」「高らかに歌え」とあり、1935 年版 *Broadsides* の No.12 に収録されているのは、この第三歌である。

青シャツ党の行進曲のために書いたものが、同じメロディで「犬をみんな溺れさせてよ」と叫ぶ激しい女の出てくる歌詞に変わっていたら、その替え歌は笑い

を誘ったのではないだろうか。

1935 年と 1937 年にクアラプレスから出版された *Broadsides* シリーズでは、50 曲近くあるバラッドのうち、古いバラッドもあれば 12 人の詩人による新しいバラッドも含まれる。そのうち 8 つのバラッドはイエイツが書いたもので、うち 3 つはアーサー・ダフやエドマンド・デュラックのようなイエイツと同時代の作曲家によるメロディがついているが、あとの 5 曲は、人々に馴染みの古くからあるメロディが使われている。

1965 年、イエイツの生誕百年を記念して息子のマイケル・イエイツは米国ノースカロライナ大学チェベルヒル校で “W. B. Yeats and Irish Folk Song” と題して、講演を行なった。そのなかで、父親がかつて記したことを要約するかのように、次のように述べている。古いゲール語の文学は完全なる口承だったが、吟遊詩人の後継者である学のある人たちによって書かれるようになった多くの詩は、

These poems were almost always written to existing melodies which were already popular amongst the people, and in this way they were sung and known everywhere, becoming a part of the folk tradition.⁵

すなわち、現存している既によく知られたメロディに合わせて書かれた、と。そして、マイケルによれば、“It was no doubt because of his wish to have his ballads widely sung amongst the people that in this and other cases Yeats chose tunes for them that were already widely popular.”⁶ であり、また

Yeats was assiduous, also, in arranging for the public performance of his ballads. They were sung at literary dinners, and on the stage of the Abbey Theatre, and there were ballad broadcasts from Irish and English radio stations.⁷

なのである。晩年のイエイツは、*Broadsides* に収録したバラッドの一つ “The Three Bushes” につけるメロディを話し合う手紙のなかで、エドマンド・デュラックに次のように書いている。

You say this poetry cannot be changed but all my life I have tried to change

it...Unfortunately it was only about a year ago that I discovered that for sung poetry (though not for poetry chanted as Florence Farr chanted) a certain type of stress was essential...Every change I make to help the singer seems to improve the poem.⁸

言い換えれば、イエイツは言葉を音楽に合わせて作り変える用意があるということだ。若い頃、ゲール語から翻訳した歌をたくさん芝居に取り入れていたとき、言葉重視の彼にとっては、その言葉に一番合うメロディを見つけ出すことが肝要だった。しかし、ここに至ってイエイツは歌い手が歌いやすいように詩を書き直す可能性を示唆している。

1938年12月から1939年1月に亡くなるまでのイエイツの様子を記したドロシー・ウェルズリーの手記には次のように書かれている。「彼が最後まで考えを巡らせていたのは、楽の音に合った言葉探しだったように思えます。」⁹

注

¹ Yeats, *Explorations* (London: Macmillan, 1962), 174.

² *The Collected Works of W. B. Yeats*. Vol. VI (New York: Macmillan Publishing Company, 1989), 179.

³ R. F. Foster, *W. B. Yeats: A Life. The Arch-Poet*. Vol. 2 (Oxford: Oxford University Press, 2003), 477.

⁴ A. Norman Jeffares, *A New Commentary on the Poems of W. B. Yeats*. (London: Macmillan Press, 1984), 500.

⁵ Michael Yeats, "W. B. Yeats and Irish Folk Song". *Southern Folklore Quarterly*. Vol. XXX (University of Florida, 1966), 154.

⁶ Michael Yeats, 175.

⁷ Michael Yeats, 176.

⁸ *The Collected Letters of W. B. Yeats*. (InteLex Electric Edition, 2002), #7014.

⁹ *Letters on Poetry from W. B. Yeats to Dorothy Wellesley*. (London: Oxford Press, 1964), 194.

* 詩の引用は、*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* (New York: Macmillan Company, 1957) による。

* 本研究は JSPS 科研費 21K00368 の助成を受けたものである。

イエイツ詩の価値を問い直す — 詩人と続く世代との対話を手がかりに

西 谷 茉莉子

詩の「価値」ほど、定義をすることが難しく、また、その語を使用する側に不安を与える言葉はないだろう。本シンポジウムに「価値」を冠するタイトルを付けたのは、多少の違和感を覚えるかもしれないこの言葉に立ち止まってみることで、イエイツ詩と新たに向き合うことができるのではないかと考えたためである。議論の出発点となったのは、海老澤邦江先生が投げかけられた「イエイツの詩はこの先残されるに値するのか、だとすれば、何を見出しどのように伝えればよいのだろうか」という問題提起であり、この喚起力ある問いかけが本シンポジウムの推進力となった。それを具体化するためのアプローチとして、副題にあるように、後の世代がイエイツ詩とどのように対話を重ねてきたかを手がかりにイエイツ詩を再考することをそれぞれの登壇者が試みた。

シンポジウムの導入部では、イエイツの後に続く世代の詩人が、詩の価値をめぐって論じる際に、しばしばイエイツを引き合いに出してきたことを例示した。イエイツの死の直後に書かれた W. H. Auden の “The Public v. The Late Mr. William Butler Yeats” (1939) はその好例であろう。法廷における検事と被告弁護人のイエイツをめぐる論戦という形式をとった詩論において、検事はイエイツが「偉大な詩人」のいずれの条件も満たさないことを論証しようとするのに対し、被告側弁護人は、詩とは一時的な社会的期待に応えるものではなく、同時代の問題に対する答えを詩人に求めるのは見当違いだと弁護する (Auden 389)。このように、弁護人はイエイツのために論戦を張るが、詩と歴史をめぐる彼の見方は限定的である。彼は、「芸術は歴史の産物であって、歴史を創り出す要因ではない。例えば、技術的発明品などとは違って、社会的に影響を及ぼす力として、芸術が歴史に度々作用することはない。だから、芸術がプロパガンダであるべきかどうかという問いは現実的ではない」 (Auden 393) と主張する。同様の趣旨が述べられるようにみえるのが、同年に書かれた “In Memory of W. B. Yeats” における有名な詩句「詩は何も起こさない」 (“poetry makes nothing happen,” Auden 242) であろう。これに応答して、Louis MacNeice は「何かを起こすことができるという

のが芸術の機能であると考えたり、行動に対して芸術が及ぼす影響が直接的である、あるいは予測可能である」とみなすのは誤りであるが、「芸術が何かを起こすことができるというのは歴史的事実である」(192)と言って、オーデンの詩論や追悼詩が示す見解に挑む。マクニースの反論の主旨は、「イエイツは人の行動に影響を及ぼそうと思って書いたわけではなかったが、芸術は人々の考えを変えることができ、それゆえ間接的に人々の行動に影響することを知っていた」(192)というものだ。

30年代の詩人たちがイエイツを介して深めた詩の効用性に関するこのような議論は、Paul Muldoon の詩“7, Middagh Street”(1987)の中に引き継がれることになる。アメリカに渡りブルックリンに住むオーデンと同居人などの七人の独白から成るこの詩には、イエイツ詩へのアリュージョンが散見され、彼らの声を通してマルドゥーンがイエイツと対話をしていることを思わせる。この詩において、語り手の一人である“Wystan”、つまりオーデンと思わせる人物は、イエイツの悔恨を表す“Man and the Echo”の有名な詩行(“Did that play of mine send out / Certain men the English shot?”)に言及し、“Certainly not”(178)と答える。「なぜなら歴史は絡まった根っこであり、芸術はその小さな透明の果実。決してその逆ではない」(178)という植物の比喩は、先述したイエイツを悼むオーデンの評論と詩の主張と響き合うものである。一方で、この詩の最後のパートにおいて、マルドゥーンは、別の語り手“Louis”、つまりマクニースを思わせる語り手に「詩は何かを起こすことができる」(“poetry can make things happen,” 192)と異議申し立てをさせている。この一連の議論は、イエイツ詩の価値を見定めることの重要性が世代を超えて意識されてきたこと、イエイツが彼らの対話者としての存在感を示してきたこと、それが新たな対話を生むことの一例であると言えよう。

本シンポジウムの本論では、このようなイエイツと後の世代との対話のあり方を基軸にしながら、各々の登壇者の問題意識のもとイエイツ詩について再考した。後に続く詩人との関係を示す例として、初めに西谷が、第二次世界大戦下でイエイツ論 *The Poetry of W. B. Yeats* (1941) を執筆していたマクニースが、詩と詩人、および外界との関係、そして詩の自律性を詩の価値を生み出す要素として真摯に追求したこと、イエイツ詩にそれを見出したことを取り上げた。中尾まさみ氏は Seamus Heaney とイエイツのエレジーをともに読むことを通して、イエイツに対する懷疑と称賛の間で揺らいでいた 1970 年代のヒーニーが、「整理されない多様さ」を詩の中に取り込むことをイエイツから学んだことを示した。柿原妙子氏は、

カナダの現代詩人 Margaret Atwood の詩 “After the Flood, We” (1964) にイエイツの “The Second Coming” のエコーを認め、両者に古いものを破壊して新しくしたいという芸術家としての願望が共通していることを指摘し、イエイツ詩が国や時代や性別の異なる現代の詩人に対しても力強く働きかけていることを例証した。最終の登壇者である山内正太郎氏の発表は、本シンポジウムの考察対象を文化事象へと広げるものであった。映画、音楽、マンガ、ジョークなどを例に大衆文化に見られるイエイツ詩の特質を考察することで、「解りやすい」と「解りにくい」、ないしは両方でもあるという多面性を、イエイツ詩の面白さであり、厄介さであると結論づけた。

シンポジウム当日の質疑応答の時間には、イエイツと大衆文化というテーマから発展して、詩と政治やジャーナリズムとの関係に話題が及んだことを補足する。メディアが発達した現代では、詩が元の文脈からかけ離れた意味を付与され、無限に拡散されていく。詩が様々な思惑で使用、時には利用されることの功罪についてはここでは立ち入らないが、詩と政治、そして詩とメディアの関係が、本シンポジウムの問題提起に対して重要な視座を与え得るテーマであることに言及しておきたい。

初のリモート開催による大会であったが、海外からの参加、チャットによる情報共有など、オンラインの利点が活かされた場となった。フロアの皆さまから貴重なご意見やご質問を賜ったことに対して、厚くお礼申し上げたい。

引用文献

- Auden, W. H. *The English Auden*. Edited by Edward Mendelson, Faber and Faber, 1977.
- MacNeice, Louis. *The Poetry of W. B. Yeats*. Oxford UP, 1969.
- Muldoon, Paul. *Poems 1968-1998*. Faber and Faber, 2001.

マクニースの *The Poetry of W. B. Yeats* から見るイェイツ詩

西 谷 茉莉子

1941 年、ゴールウェイで *The Poetry of W. B. Yeats*(1941) を書いていた Louis MacNeice は、ドイツのポーランド侵攻のニュースを聞き、ゴールウェイもイェイツ詩も、さらにはロンドン、現代芸術、左翼思想もすべて「現実味の無いもの」(“unreal”)になった(17)と回想している。イェイツの死、そして大戦の影響を色濃く受けたこの詩論は、イェイツに「擁護的」であると評されることも多い。マクニース自身の言葉がそれを裏付けている。*The Poetry of W. B. Yeats* において彼は、「イェイツが自分にとって魅力を持っている理由を突き止め、他の人々に対してイェイツが共感を持つように示したい」と述べ、当時の「破壊的な」批評の傾向と大戦下の社会に対して、イェイツ詩の価値を正当化する必要性(17)を主張しているのだ。

The Poetry of W. B. Yeats において、マクニースが「詩の価値」について論じている箇所がある。彼によると、詩は外界からあまりにも離れすぎていても、あまりにも隷属しすぎていてもバランスを欠いたものになってしまう。同様に、個人が自足してしまっても、詩人を取り巻く世界にただただ屈してしまってもやはりバランスを欠いてしまうという。そして、このような、詩と、詩人の人生と詩人を取り巻く外界(life)との関係性が、詩の価値を生み出す要因である(29)と述べられる。ここでマクニースが示した、詩と詩人、および外界の関係のあり方は、イェイツ詩において具体的にどのように表れているのだろうか。発表では、マクニースの論点を取り上げ、それを基にイェイツの内戦についての連作“*Meditations in Time of Civil War*”の VII “*I See Phantoms of Hatred and of the Heart's Fullness and of the Coming Emptiness*”を読み直した。そのうえで、*The Poetry of W. B. Yeats* の中でマクニースが見出したイェイツ詩の価値について考察した。

Richard Ellmann は、オックスフォードで 1920 年代に学んだ詩人たちは、イェイツが偉人であるか愚者であるかわからず戸惑ったと述べているが、イェイツの現代社会に対する「逃避的」な姿勢、彼の詩が「事実」を扱わないこと、そしてオカルト的傾向が読者を戸惑わせる要因であったことは、マクニースも認

めるところであった。しかし、このイエイツ詩のいわばリスクにも見える要素が価値あるものとして繰り返し説明される。その際マクニースがイエイツと対比させるのが T. S. Eliot である。彼はエリオットについて、詩人は外界に適応すべきだ、詩人を取り巻く社会が難解で複雑であれば、その詩も難解で複雑でなければならないという前提のもと詩を書いた (191) と述べる。その一方で、Auden や Spender については、イエイツと同じく詩人の責務を「世界を理解し、わかりやすいものにし、形を与えること」として受け止めていたと言い、「混沌とした世界に対抗するシステム」、およびエリオットの「受動的な印象主義」(“passive impressionism”)とは異なる「能動的な芸術」(“positive art”)を生み出したとする (191)。それにより、共産主義の信念、精神分析の理論にしたがって現代社会を形作ろうとしたオーデンやスペンダーは、イエイツと信念は違えどシステムを見出した点で同類であるとされ、エリオットが悲惨さ、不満、衰退を見出したのに対し、彼らは「英雄的な苦闘」(“heroic struggle”)「英雄的な敗北」(“heroic defeat”)を見出した (191) と主張する。このように、エリオットを引き合いに出すことで、オーデン、スペンダー、イエイツを同類にするような二分法は乱暴に見えるかもしれない。だが、イエイツ詩にみられる現実から距離をおく態度を、混沌とした現代世界に対抗するための秩序を与えるもの、および能動的なものとして価値観を反転させていることは留意すべきであろう。

このようなマクニースの論点をもとに、イエイツが内戦と向き合った詩を読み直す。イエイツにとって内戦時に詩を書くことは詩と外界の関係性の再定義を迫るものであった。“I See Phantoms of Hatred and of the Heart's Fullness and of the Coming Emptiness”では、語り手の幻視によってまさに「混沌とした世界を理解し、わかりやすいものにし、形を与えて」いくプロセスが描かれる。この詩の最終連において、語り手は、世間の期待や義務を無視して、自らのヴィジョンに忠実であること、すなわち詩の自律性を守ることを選ぶ。オカルトの啓示によって内戦が描かれることはこの詩の語り手を「逃避的」に見せる。その一方で、終末論的なヴィジョンが重ねられた内戦において、無秩序な世界に形を見出し、彼自身の芸術のあり方を守り抜こうとするこの語り手は、Fran Brearton も指摘するように「英雄的」(65)であるとも言えないだろうか。このように詩の自律性が肯定されるところでこの詩は終わる。ただし、詩や詩人は完全に社会から切り離されたわけではないことも示唆される。最終連の“abstract”や“suffice”などの語の曖昧性に、語り手の葛藤や迷いを読み込むことは可能であろう。語り手は、とらなかつた選択

肢にも強く惹かれているのである。

イエイツ詩に見られる詩と外界の間のバランス、およびその中で見出される詩の自律性は、外界の暴力や動乱に脅かされ、その関係性の再定義を求められるような状況下で、特に意識されるものであろう。マクニースが大戦下において、イエイツの現実から距離をとる態度に「混沌とした現代世界に対抗するための秩序」や「能動性」という肯定的な価値を与え、イエイツに共感を持って読む読み筋を示したことは不思議ではない。あらゆる価値観が「現実のもの」ではなくなってしまった衝撃の中で、マクニースは「自分にとってのイエイツ詩の魅力」(17)を言語化することを重視した。その姿勢から、*The Poetry of W. B. Yeats* 執筆時のマクニースのイエイツ詩に対する絶大な信頼を読み取ることができる。

引用文献

Brearton, Fran. *The Great War in Irish Poetry: W. B. Yeats to Michael Longley*. Oxford UP, 2000.

MacNeice, Louis. *The Poetry of W. B. Yeats*. Edited by Richard Ellmann. Oxford UP, 1969.

「ともに食卓を囲むことの叶わぬ友人たち」 —イエイツとヒーニーのエレジーをめぐって

中 尾 まさみ

W. H. Auden は“Yeats as an Example” (1948) で、詩人が先行する詩人の作品を読むとき、その関心は作品自体の価値にではなく、自分が現在直面している詩作上の問題の解決に何を与えてくれるかにある、と述べている。(Auden 187) このタイトルに疑問符をつけた“Yeats as an Example?” (Heaney, *Preoccupations* 98-114) を 1978 年に執筆した Seamus Heaney が、北アイルランド紛争という現実の脅威とその中を生きる詩人の位置という、自身の詩作上の問題を念頭においてイエイツを読んでいたことは、想像に難くない。

この論考からは、ヒーニーのイエイツに対する気持ちの揺らぎが読み取れる。彼はまず、芸術と人生の間に線を引き、自らは芸術の側、ヴィジョンの「防弾ガラス」の中に身を置くイエイツの強硬さを暴力的でさえあると批判し、これが「模範」と言えようかと問う。しかし、その一方でイエイツは人生と作品を連続性の内に捉えていたと評価し、自分のヴィジョンを行動に移した、その断固たる態度にこそ芸術家の誠実さ“integrity”があると擁護もする。懷疑と称賛をないまぜにイエイツの姿を追うヒーニーは、現実と芸術の距離や相関に焦点を定め、自分自身の詩について考えながら、イエイツの詩を読んでいた。

“Yeats as an Example?”発表の翌年に出版されたヒーニーの詩集 *Field Work* には、第一次世界大戦で戦死した詩人 Francis Ledwidge へのエレジーが含まれている。本発表では、同大戦で戦死した Robert Gregory にイエイツが書いたエレジー群とともにこの詩を読むことで、この時期のヒーニーのイエイツ観を考察することを試みた。

レドウィッジは、「アイルランド義勇軍」(Irish Volunteers) に加わるナショナリストであった。開戦当初「義勇軍」が分裂した際には、イギリス軍に志願しない側に立ったが、1ヶ月後にはなぜか一転従軍し、復活祭蜂起後にはさらなる葛藤を感じたものの、結局はイギリス軍兵士として戦死した。詩の中でヒーニーは、彼を「私たちの死した謎」(“our dead enigma”)と呼んでいる。アイルランドの運命が揺れ動いた時期に、これに翻弄されて不可解な道筋を辿って死んだ彼の人

生は、歴史と個人の複雑な関係を物語っている。

“In Memoriam Francis Ledwidge” (Heaney, *Field Work* 59-60) は、戦没者記念碑の兵士像の描写から始まる。像はブロンズ製で、風に吹かれた一瞬を捉えたようでもそれは「堅く」(“stiffly”)、その風も「想像上の」(“imagined”)ものである。ヒーニーは、従軍の実際を「本当の風」(“real winds”)に翻弄され、逃げまどう姿として並置し、戦争の理想と現実を露わにする。しかし、レドウィッジが自治を求めたカトリックのアイルランド人であることで、その偶像にはさらなる齟齬が生ずる。

ヒーニーは、1992年にレドウィッジの選詩集に序文を書き、そこで彼をイエイツの“An Irish Airman Foresees his Death” (Allt 328)におけるロバートと比較している。(Bolger 20) 政治的には反シン・フェインであり、イギリス軍の一員として参戦することに葛藤がなかったロバート (Foster 118-19) の死を、イエイツはこの詩で現実の複雑さを一瞬にして超克する芸術的昇華として高らかに謳いあげた。しかし、「紛争」のただ中に生きる70年代のヒーニーは、レドウィッジの抱いた葛藤や迷い、後悔にこそ共感していたのではないか。

では、イエイツは「模範」たり得なかったのか。そのヒントもまた、ロバートへのエレジーにある。Augusta Gregoryの依頼を受け、その期待に応えようとイエイツが矢継ぎ早に書いた3篇のエレジーは、それぞれ全く違う形式であることから、彼がロバートの死について詩を書く方法を模索していたことが窺える。

最初に書かれた“The Shepherd and the Goatherd”(Allt 338-43)が古風なパストラルの形をとったのは、復活祭蜂起直後のアイルランドで、上述のロバートの立場の厄介さを回避するためには必要な方便であったが、パストラルの枠組みがほころび、現実が透けて見えるようなこの奇妙な詩が、追悼の目的も十分果たさず、オーガスタの不興を買ったことはよく知られている。

しかし、この詩には、別の側面がある。ロバートと思いき若者の死に心を痛めた若い羊飼いは羊を迷わせてしまい、その結果、山羊飼いと出会う。喪失をきっかけに他者の領域に踏み込み、対話が始まるのだ。この対話で山羊飼いは、死んだ若者の母親に自分がかつて受けた歓待という、もう一つの出会いを想起する。それがイエイツ自身のクール・パークでの思い出であることは明らかであり、さらにこの暖炉を囲む光景は、そのままもう一つのエレジー、“In Memory of Major Robert Gregory”(Allt 323-28)のバリリー塔の描写とも重なっている。

イエイツの新たな詩的拠点となるバリリー塔に降霊会さながら呼び出される

死者たちは、それぞれ違う時期に違う場面でイエイツと親交のあった人々であり、そこに新参者として妻 George が紹介される。この詩でもロバートは、“An Irish Airman”の描写に通底する、一瞬にして燃え尽きる生の完遂としての火の比喻で描かれるが、暖炉の火の暖かみとそこに集う人々は、それとは異質のエレジーの機能を現前させる。

現実を脅威として芸術で対抗するのでなく、その整理されない多様さを詩の中にとりこむ懐の深さは、70年代に詩作を行ってきたヒーニーには、見習うべき力となったのではないか。“In Memoriam Francis Ledwidge”には、レドウィッジ自身について以外の描写が多い。戦没者記念碑の描写は、1940年代半ば、若い詩人が伯母 Mary Heaney と遠出した思い出にもとづいており、街の風景が当時の記憶をたぐるように映像的に描かれる。レドウィッジの戦地での苦難や葛藤は、同時期の伯母の農村での生活と並列される。子供時代のヒーニー自身、歴史の濁流に呑み込まれてイギリス兵として死んだレドウィッジ、その間も継続された伯母の暮らしは、詩人ヒーニーの想像の中に、そしてこの詩の中にだけ呼び集められたものである。その意味で、イエイツが“In Memory of Major Robert Gregory”で作り上げた、整理しきれない集合と似てはいないだろうか。

オーデンもヒーニーも認めるとおり、イエイツは、自分の個人的な関心に囚われてそれを生き、また詩の中に持ち込むことを恐れなかった。一方、初期のヒーニーの詩には、どんなに個人的な記憶に基づいても、それを作品の構成要素として整理する端正さがあった。しかし、「紛争」を経験する中で、そうした詩作の方法は再考を迫られていたのではないか。詩の中にしか実現しない集合を現前させつつ、詩人自身にも制御しきれない現実の断片をそのまま残すという現実との距離の取り方は、ヒーニーのイエイツ体験の重要な一部を成す。この後、*Station Island*で死者との邂逅をより積極的な形で行うヒーニーにとって、イエイツは相容れないところと学ぶところの両方をもつ詩人になった。“Yeats as an Example?”が揺らいで見えるのは、それこそがヒーニーにとって意味のあるイエイツの読み方であったからなのである。

引用文献

- Allt, Peter and Russell K. Alspach, eds. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. London: Macmillan, 1957.
- Auden, W. H. "Yeats as an Example". *The Kenyon Review*, vol. 10, no. 2 (Spring 1948), 187-195.
- Bolger, Dermot, ed. *Francis Ledwidge: Selected Poems*. Dublin: Dolmen Press, 1992.
- Foster, R. F. *W. B. Yeats: A Life*, vol. II, *The Arch-Poet 1915-1939*. Oxford: OUP, 2003.
- Heaney, Seamus. *Field Work*. London: Faber, 1979.
- _____. *Preoccupations: Selected Prose 1968-1978*. London: Faber, 1980.

*本発表に大幅に加筆・修正を施した論考を、以下に掲載した。

https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003656#.YwJZYy_3KTc

イエイツを読むマーガレット・アトウッド

柿原 妙子

イエイツの詩は世界の多くの国で読まれ、その国の詩人たちに影響を与えてきた。この発表ではカナダの現代詩人マーガレット・アトウッドにおけるイエイツの影響を考える。アトウッドは『侍女の物語』などのディストピア小説の著者として、また活発なフェミニスト、エコロジストとして知られているが、もともとは詩人としてスタートしており、今日まで数多くの詩を発表している。その中にはイエイツの影響が明示的、暗示的に感じられる作品がいくつかある。本発表ではアトウッドの詩“After the Flood, We”を例に取り、そこに見られるイエイツの“The Second Coming”のエコーを確認したのち、古いものを壊して新しくする願望が詩人としての二人に共通してあることを指摘する。

アトウッドの“After the Flood, We”はギリシア神話をベースにしている。この神話では大洪水が起きて人類が滅亡したあと、残った一組の男女が神託を請うと、「母親の骨を肩越しに投げよ」と告げられる。男デウカリオンは、「母」とは地母神ガイアで「骨」とは石のことだと解釈し、彼が肩越しに石を投げると、石は次々と人間になる。デウカリオンの機知によって、人類は再び増えていったという話である。

この神話を発想源とするアトウッドの詩は、大洪水が起きた直後の設定である。「わたし」は一変したまわりの景色を観察しているが、一緒にいる男性の「あなた」はのんびり散歩しているだけで、洪水が起きたことにさえ気づいていない。「わたし」は神託どおりに母親たちの骨を集めようとするが、「あなた」は何も考えずに地面の石をきまぐれに投げる。その結果、次のような生きものが誕生するが、「あなた」はその迫りくる足音も聞こえず、振り返って見ることもしていない。“[You are] not hearing the first stumbling / footsteps of the almost-born / coming (slowly) behind us, / not seeing / the almost-human / brutal faces forming / (slowly) / out of stone” (ll. 26-33)。石からできかけているこの新しい生きものは“brutal faces”をして、よろめきながらゆっくりと二人に迫ってきている。この新しい人類出現の不気味な描写は、イエイツ詩の読者に“The Second Coming”

を思い出させるのではないか。イエイツの詩の終わりの部分はこうなっている。
“... but now I know / That twenty centuries of stony sleep / Were vexed to nightmare
by a rocking cradle, / And what rough beast, its hour come round at last, / Slouches
towards Bethlehem to be born?” (ll.18-22) イエイツが描く新しい人類“rough beast”
もまた石から生まれる直前の赤ん坊だ。獣の野蛮さを秘めながら、同じく不気味
な足取りで進んでくる。この生きものとアトウッドの新しい人類はその恐ろしげ
な様子が似通っており、この詩を書くアトウッドの念頭に“The Second Coming”
があったと想像できる。

イエイツの“The Second Coming”の場合は、多くの批評家はこの詩でイエイツ
がやってくる次の時代に恐怖を感じ、暗い未来を予言していると考えてきた。し
かし別の解釈の可能性も提示されており、“rough beast”のいかにも恐ろしげな描
写で不安を煽る一方で、詩人が破壊的な未来に期待したり、興奮や喜悅さえ感じ
ている気配が読み取られている。また男性性を思わせる力の暗示もあり、詩人が
暴力的な破壊に惹かれていることも指摘されている。

このような破壊に惹かれるイエイツの傾向については、19世紀末のパリでア
ルフレッド・ジャリの暴力的な問題作『ユビュ王』の上演を見た際のエピソード
が重要だろう。イエイツはこの観劇のあとホテルに帰り、よく知られている一文
を書きつける。その最後は“After us, the savage god”である。ここには野蛮な神の
時代が迫っているという予感が示されているが、自分が慈しんできた古い美しい
時代が壊されることへの嘆きだけでなく、劇場で聴衆とともに感じた衝撃的な新
しさに対する、奇妙な興奮も感じられるのである。この『ユビュ王』の衝撃は晩
年に至るまでイエイツの作品に刻印を残したと考えられている。

ところでアトウッドの詩の題名“After the Flood, We”は、イエイツのこのとき
のフレーズ“After us, the savage god”に非常に似ている。イエイツのフレーズが
意味するのは、彼が古い時代の人間であり、自分たちが築き上げた芸術が新しく
登場した「野蛮な神」に壊されるということだが、一方アトウッドは洪水によっ
て古い時代が壊されたあとは自分たちの時代になると言っている。「あなた」が
不注意に石を投げた結果、野蛮な新しい生きものを送り出してしまったので、こ
れから自分たちは彼らとともに生きることになるというわけだ。

アトウッドはこのようにイエイツを明らかに想起させる詩で何を言おうとし
ているのか。“The Second Coming”の持つ暴力性や楽観性など男性中心の世界観
への、フェミニストでエコロジストとしての批判だろうか。彼女は環境破壊を

テーマにした小説を多く書き、科学や産業の暴走を批判してきた。だからこの詩でも、「わたし」のようにまわりの環境にこまやかに注意を払い、自然と一体となって生きるべきだと警告していると、まずはそのように考えられるだろうか。

しかし、アトウッドが意図しているのもそれだけではないのかもしれない。実は彼女にもかなり強い破壊願望があることが小説や詩から見受けられるからだ。たとえば“After the Flood, We”と同じく初期に書かれた詩“A Paper Bag”では、語り手はハロウィーンの仮装のつもりで紙袋を頭にかぶって顔を作るが、自分の姿を鏡で見ると意外にも凶悪で、怖そうな姿になっている。その紙袋をかぶった新しい自分は“idiot”のように、ニタニタ笑って遠慮せずに未来に向かって歩いていく。語り手はこのモンスターが気に入る、新しい自分になれば何でも口に出せるし、新しいストーリーが生まれるのだと締めくくる。

“A Paper Bag”の生まれようとしている不気味なモンスターは、子どもが持つある種のイノセンスも持っている。バーバラ・ジョンソンは評論“My Monster / My Self”でメアリ・シュリーの小説『フランケンシュタイン』を評して、科学者フランケンシュタインが実験で生み出してしまった怪物が作者の似姿であると指摘したが、アトウッドのモンスター的な生きものも彼女自身と考えられる。空っぽの怪物がこれから新しいストーリーを創造するのである。“After the Flood, We”でも、「わたし」はこのイノセントなモンスターたちと一緒に破壊後の新しい世界を生き直そうとしていると想像できるのではないか。既成のものを破壊して、何もなくなったところから立ち現れる野蛮だがイノセントなモンスターを自分自身として肯定し、そこから生まれる新しい創造性を思い描いているのだ。

この点においてこの詩は、新しい時代の荒々しい芸術を予言し、それに期待するかのようなイエイツの“The Second Coming”と響き合っているといえるだろう。イエイツも、コンパニオンポエムと呼ばれる同時期の“A Prayer for My Daughter”に見られるように美しく貴重なものを守りたいと願いながらも、同時に古いものを破壊したいという芸術家としての暴力的な欲望を若い頃から感じていた。そのため“The Second Coming”では、現代社会に対して予言のかたちを取って警告を発しながらも、同時に既成のものを破壊して新しい芸術を創ろうとする自身の願望を“rough beast”にひそかに託しているのである。今回取り上げたアトウッドの例に鮮明に示されているように、イエイツの詩は国や時代や性別の異なる現代の詩人に対しても、力強く働きかけているのである。

引用文献

- Atwood, Margaret. *Eating Fire: Selected Poetry 1965–1995*. Virago Press, 2010.
- Johnson, Barbara. *A Life with Mary Shelley*. Stanford University Press, 2014.

大衆文化の中のイエイツ詩：映画、音楽、マンガ、そしてジョーク

山 内 正太郎

序論：2010年の日本イエイツ協会で行われた研究発表に、片岡由美子氏による「ポップカルチャーの中の W. B. Yeats — The Waterboys を例に一」がある。The Waterboys は英国のロックバンドであり、“An Appointment with Mr. Yeats” (2011年)と題された全編イエイツの詩をロック化したアルバムを片岡氏の発表の一年後にリリースしている。今回の発表では主に女性アーティストによるイエイツの詩の音楽化について、さらにはイエイツの詩がどのように映画で用いられたか、またはどのようにマンガ化されてきたか、ないしはどのようにネット上でのブラックジョークとしてパロディ化されてきたか、ということにも同様に触れた。

今回のシンポジウムの問題提起は「イエイツの詩はこの先残されるに価するの
か、だとすれば、何を見出しどのように伝えればよいのだろうか」である。これ
からもイエイツの詩が読み継がれていくとすれば、大衆文化はイエイツの詩を後
世に運び届ける vehicle となりうるのか？大衆文化の中で扱われるイエイツの詩
にはどんな特徴・共通点があるのか？本発表ではそのことを考察した。

映画：1992年に書かれたロバート・ジェームズ・ウォラーの代表作 The
Bridges of Madison County は、名優クリント・イーストウッドを主演として
1995年に映画化された。The Bridges of …は写真家と農家の主婦の恋物語であ
る。この二人が関係を深めるためのきっかけとしてイエイツの詩“The Song of
Wandering Aengus”が使われている。写真家は“The Song of …”の最後の二行を朗
誦し、それがイエイツの詩であることを農家の主婦は指摘する。そして写真家は
自分がイエイツの詩を好きなのは自分がアイルランドの血を引いているからだ、
と言う。写真家はアイルランド系アメリカ人だった。

また、同じクリント・イーストウッドが主演と監督を務める 2004年のボクシ
ング映画 *Million Dollar Baby* では“The Lake Isle of Innisfree”が効果的に使われて
いる。主人公のトレーナーはアイルランド系で、イエイツの詩をゲール語で読み、
彼の弟子である女性ボクサーに読んで聞かせる。

次に取り上げた映画はスティーブン・スピルバーグ監督の2001年の映画“A.I.”である。人間になりたいと願う少年ロボットについての物語だが、この映画では“The Stolen Child”が用いられている。ロボットが人間になるにはどうすればいいか、という少年ロボットの問いに対してコンピューターは“The Stolen Child”のリフレインの部分を朗唱する。

この映画の終盤で「僕を人間にして」と少年ロボットは「ブルーフェアリー」と呼ばれる異世界の存在に願い続ける。少年ロボットはブルーフェアリーこそが自分を人間にしてくれると信じ、ブルーフェアリーを探す旅に出る。フェアリーにいざなわれ、遠くの世界に旅立つ少年ロボットの姿は、“The Stolen Child”の物語にも通じるものがある。

音楽：まずは片岡由美子氏も言及された The Waterboys に触れた。例えば“The Hosting of the Sidhe”のロックヴァージョンでは、一般的に言われるようなディズニーのティンカーベルのような妖精ではなく、獰猛さを持ったケルトの妖精の群れが超高速で飛行していく様子がロックの激しいビートで表現されている。

女性アーティストではまず、ヴァージニア・アストレイという英国のシンガーソングライターに触れた。“Had I the Heavens”という題で“He Wishes for the Cloths of Heaven”に曲をつけている。包容感のある優しい歌声である。この歌が収録されている1996年のアルバム“Had I the Heavens”には別れた恋人に語りかける曲が多く収録されている。手前勝手な想像だが、ヴァージニア・アストレイはモード・ゴンとの叶わない愛を経験したイエイツに対して、性別は違えど共感を覚えていたのだろうか。

次のロリーナ・マッケニットというアーティストはカナダのアーティストであり、“The Stolen Child”を歌っている。ハーブの音が美しい曲である。“The Stolen Child”は1988年のアルバム“Fisherman’s Blues”で The Waterboys もカヴァーしているのだが、ほとんどが詩の朗読で起伏がなく面白みに欠ける。それと比べ、ロリーナ・マッケニットのヴァージョンはエモーショナルである。

最近のイエイツの詩の音楽化でいうと、2021年の7月に“I AM OF IRELAND – Yeats in Song”と題されたアイルランド伝統音楽のサウンドでイエイツの詩に曲をつけたアルバムがリリースされた。アイルランド伝統音楽にのせてイエイツの詩を歌う、というケースは過去を遡っても意外と少なく、新しい試みである。

マンガ：ジュリアン・ピーターズという漫画家が日本の少女マンガのスタイルで“When You Are Old”を表現している。2017年第53回日本イエイツ協会で、柿

原妙子氏を司会として「教室のイエイツ、教室の英詩：英語教育をあきらめないために」と題されたシンポジウムが行われたが、このマンガはイエイツの詩を知らない学生たちにとっても詩の中で何が起きているのかを理解させるのに良いのではないかと。また“When You Are Old”という詩の物語性に気づかされるマンガである。

ブラックジョーク：Uncyclopedia という、Wikipedia のパロディサイトを紹介した。このサイトでは Ida Taphat というモード・ゴンになぞらえた女性に「二回求婚して、これが最後なんだけどもう二回求婚して、本当にこれが最後なんだけどまた二回求婚して…」という調子でモード・ゴンへの求愛をギャグ化しながらイエイツを説明している。

結論：「イエイツの詩はこの先残されるに価するの、だとすれば、何を見出しどのように伝えればよいのだろうか」。

答えは“Yes”だろう。しかし、この先イエイツの詩が読まれ続け、残されるにしても、二つの形があるだろう。一つは Celtic Twilight 期のような官能的で、スッと入っていくような「解りやすい」詩が愛誦され、大衆メディアの中で繰り返し取り上げられるような残され方。二つ目は、象徴的で難解な詩がアカデミズムの中で理知的に論じられ、後世に問題を投げかけるような残され方、である。1999 年の年末に *The Irish Times* で “Ireland's 100 favorite poems” という記事が載り、イエイツの詩は 6 つも Top 10 に入った。そのほとんどが Celtic Twilight 期の詩作品で、今回私が取り上げた映画、音楽、マンガ、ブラックジョークで取り扱われたものである。もちろん Celtic Twilight の詩にも理知的な読みを要請する詩はたくさんあり、今回扱った詩もそうであろう。加えて、我々は 20～21 世紀を生きて “The Lake Isle of Innisfree” のような詩を愛誦しているが、100～200 年後、その詩が難解なものになっているのかもしれない。

我々日本人にとって解りやすい例は宮沢賢治だろう。『雨ニモ負ケズ』のような解りやすい詩は大衆メディア、大衆文化の中で繰り返し言及され、土産物にも印刷される。その一方で『春と修羅』というような難解な象徴詩も賢治は書いている。『春と修羅』が土産物に印刷されたという例はないのではないかと。

そういった「解りやすい」と「解りにくい」、ないしは両方でもあるという多面性を持っているのがイエイツ詩の面白さであり、厄介さでもあるまいか。…というのが私からの問題提起というか、回答である。

亡霊を呼び起こしたものは何か： 『骨の夢』における若者の祈りについて

伊 東 裕 起

能楽を下地にした W. B. イェイツの演劇『骨の夢』(*The Dreaming of the Bones*)は、1916年の復活祭蜂起に参加した若者がアイルランド西部の山の中で、12世紀にノルマン人をアイルランドに招き入れたディアミードとダヴォーギラの幽霊に出会う話である。しかし、何が二人の幽霊を呼び出したのだろうか。また、そのトリガーが意味し得るものは何なのだろうか。ダヴォーギラの幽霊はハンラハン物語にも登場するが、この場合、幽霊を呼び出す明確なトリガーが存在する。当該エピソードは1897年版と1904年版の二つの版があるが、そのトリガーは共通している。かつての恋人の死んだ地で(罪深い)古代の恋人たちの歌をうたい、花びらをハーブから散らすと超自然的な存在となった恋人たちが現れ、その中にダヴォーギラがいるのである。ハンラハンとダヴォーギラには「恋」という共通点があり、その共通点をつなぐ恋の歌によって彼女の幽霊は呼び出されたのだと思われる。

さて、『骨の夢』の場合はどうだろうか。『骨の夢』の第1草稿の場合、設定が大きく異なっている。舞台が1798年ユナイテッド・アイリッシュメン蜂起後のアイルランド東部となっており、若者は同蜂起のヴィネガー・ヒルの戦いから逃げてきた男で、マクダーモット(MacDermot sic, 表記ゆれあり)という名前がある。彼がディアミードの末裔であることが名前で示唆されているだけでなく、「ディアミードの民」など実際の台詞でも強調されている。そのような疑似親子関係もあるが、第1稿において若者マクダーミットがディアミード(およびダヴォーギラ)を呼び寄せた直接的なトリガーは、彼が歌う抵抗歌である。若者が“The French are on the sea”を歌うと二人の幽霊が登場するのだが、これはアイルランドを擬人化した女神たる Cathleen Ni Houlihan を歌う抵抗歌“The Shan Van Vocht”の第1節である。ナショナリズムと結びついたアイルランドの女神(あるいは化身)の歌と亡国の徒とされる二人の幽霊の対比は皮肉な効果を示している。

第2稿からは完成稿に近い形となり、舞台は1916年復活祭蜂起直後のコーコムロー修道院周辺、若者も名前がない人物となる。第2稿以降で抵抗歌の代わり

に置かれているのが、アイルランド語あるいはラテン語（“in Irish or Latin”）の祈りである。第3草稿以降ではアイルランド語の祈りと限定されるが、何の祈りだろうか。アイルランド語という言語の重要性を指摘する先行研究もあるが、言語が重要ならば、草稿とはいえ“or Latin”とはしないのではないだろうか。ただアイルランド語を語っただけではなく、祈ることが重要だったのではないだろうか。

能楽では多くの場合、ワキは僧侶として、シテの観察者であると同時に祈り手という立場を務める。ワキとしての若者が二人の幽霊を招いたとするならば、彼はどんな祈りを祈ったのだろうか。1931年のアベイ座上演時の祈りは特定できなかったが、特定できないとするなら、妥当だと言えるものは何かあるだろうか。ラテン語の可能性があるので成文祈祷、それも平信徒でも暗唱できるものであるだろう。カトリックであれ、聖公会などのプロテスタントであれ祈る祈り、他の成文祈祷を唱えていたとしても、間に挟む可能性の高い祈りとして「主の祈り」がある。これには「我らに罪を犯すものをわれらが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」という一節があるが、演出の一案として、この祈りを用いる演出は可能なのではないだろうか。赦せないがゆえに彼は二人の幽霊を招いたが、それゆえに二人の幽霊が救われることもなかった、といった演出上の効果も生まれる。

いずれにせよ、二人の幽霊を招いたのは若者の祈りの言葉である。それは草稿の改作過程において、最初のトリガーであった抵抗歌の位置に祈りが置かれていることからわかる。若者は能楽におけるワキとして、『錦木』における僧侶のような祈り手の立場を半ば担った。しかし、彼の赦しを知らないナショナリズムゆえ、此岸と彼岸を結ぶ“dreaming-bridge”（フエノロサ＝パウンド訳『錦木』）を築くには至らなかったのである。

風の詩学：斬首における不在と表象のアポリア

石 川 隆 士

本発表は“The King of the Great Clock Tower”および“A Full Moon in March”における斬首のモチーフを喪失による表象という観点から考察した。タイトルを「風の詩学」としたのは本考察が「風の詩学：豎琴と螺旋」という研究テーマの一部をなすからである。そのテーマと本発表との関係性をまず明らかにしておく。風の詩学とは、風にかかわる言説を体系的に分析することであり、今回の発表は「豎琴」と「螺旋」という二つの対立項のうち後者に関係する考察である。「豎琴」はギリシャ神話の昔から宇宙の体系的調和の象徴である。一方「螺旋」は混在する多様な存在が互いの関係を見出しながら実現されていく生成的な調和を表象している。特に 20 世紀以降、世界の多元化に符合するように「螺旋」は顕著にたち現れる。この体系的調和から生成的調和へ向かう表象の変遷は、自らを取り囲む空間の内なる原理を積極的に創造する意識への移行と連動していると仮定できる。この自らを取り囲むものとの「見えざる関係」を最も本質的に表象するのが風である。風の詩学は、この風を導き手としながら体系的調和から生成的調和への変遷を追究するものであるが、特に W. B. Yeats の二重螺旋はその原理的特質と時代性の両面において特異な意匠である。

「螺旋」の表象への移行は 20 世紀に入って顕著となる。その序章として、短命には終わったが 1913 年に Ezra Pound を中心として興った芸術運動 Vorticism「渦巻き派」がある。その機関紙 *Blast* の名が示すとおり基調メタファーは風であり、第一次世界大戦に向けての不穏な空気を孕みつつ多様化する世界を表象する新たな芸術様式に渦巻きの名称を冠している (Timothy Materer 13-21)。少し遅れて 1917 年にイエイツが自身の神秘主義思想を体系化した *A Vision* の基盤となる自動筆記に着手することとなるが、その基本シンボルが二重螺旋であり、そのシンボルのメタファーとして風があてられることが多い (*A Vision* 67-83)。

この二重螺旋と風との結びつきにおいて最も明示的なもののひとつでありながら謎に満ちたフレーズが、“Nineteen Hundred and Nineteen”の“the labyrinth of the wind”である (line 121)。その“labyrinth”の企ての主体が“Herodias' daughters”

であり、その目的 “[t]heir purpose” は具体的に言葉にされていないが、おそらく Oscar Wilde の *Salome* に代表されるように 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパ芸術界を魅了した「美しき首斬女」の奇業、すなわち「斬首」として一般的な承認が可能であったからであろう。

ここで「斬首」がようやく「風の詩学」に結び付くわけだが、“labyrinth”を迷宮といった構造物とせず、あえて「企て」と表現したのは、あまたの“labyrinth”研究が進む中で、この言葉が指し示すものが、かのミノタウロスとテーセウスの神話を超えて死と再生の循環の儀式である可能性が出てきたからである（石川 80-81）。R. F. Foster はイエイツの回春手術と創作意欲の回復の文脈の中で、“The King of the Great Clock Tower”と“A Full Moon in March”に触れ、両者の主題を“the old ritual of the year: the mother goddess and the slain god”と表現している（502）。この主題こそ、死と再生の循環の儀式たる“labyrinth”と同一なのである。

発表においては Julia Kristeva の『斬首の光景 *Une Vision Capitale*』の概念“figure”について触れた。それは斬首された頭が、前提とするものの代替物でありながら差異化された能動的な役割を担うというものであるが、確かに“The King of the Great Clock Tower”においても、“A Full Moon in March”においても、斬首された頭は高次の存在の指し示しながら、同時にその場において脈動し、ダンスの中で the Queen との関係を結んでいる。

“The King of the Great Clock Tower”では the Stroller、“A Full Moon in March”においては the Swineherd という、その不遜によって斬首された男共は、自らが美しい the Queen に引き合う存在であることを主張しながら、舞台上その具体的な要件は明示されない。両者に高次の存在としての何らかの要件があると仮定して、それを提示する機会は斬首によって奪われ、現出しえない不在として遠ざけられる。そしてその代替の表象として斬首された頭に、崇高さとは言わないまでも、少なくとも the Queen を誘引する属性が顕現したことだけは明らかである。この一方の喪失と他方の顕現は、単一のものの連続性から考えれば、断絶と空白が生じることになるが、イエイツの二重螺旋における対立項の循環を背景にすれば、そこに連続性を見出すことができ、むしろ斬首は一方から他方への大転換の瞬間という重要な局面を表象しているといえる。

Works Cited

- Foster, R. F. *W. B. Yeats: A LIFE*, vol. II, *The Arch-Poet 1915-1939*. Oxford UP, 2003.
- 石川隆士. "Noli me Tangere: "Nineteen Hundred and Nineteen" における触れる風. 『地域文化論叢』第18号. 沖縄国際大学大学院地域文化研究科, 2017. 77-88.
- Kristeva, Julia. 『斬首の光景 *Une Vision Capitale*』星埜守之、塚本昌典訳. みすず書房, 2005.
- Materer, Timothy. *Vortex: Pound, Eliot, and Lewis*. Cornell UP, 1979.
- Yeats, William Butler. *The Collected Works of W. B. Yeats*, vol. II, *The Plays*. Ed. David R. Clark and Rosalind E. Clark. Scribner, 2001.
- _____. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. Ed. Peter Allt and Russell K. Alspach. Macmillan, 1957.
- _____. *A Vision*. Macmillan, 1937.

イエイツ研究関連書誌 2021.10 ～ 2022.9

<研究書・翻訳>

イエイツ

イエイツ著, 芥川龍之介訳, ホノジロトラジ絵
春の心臓. 立東舎.

2022-04

グレゴリー夫人

グレゴリー夫人著, ケイロカミオカ訳, ZEN 絵
ムルセヴネのクーフォーリン. 全5巻. Kindle.

2020-10 ～ 2022-05

ジョイス

金井嘉彦, 吉川信, 横内一雄

ジョイスの挑戦:『ユリシーズ』に嵌る方法. 言叢社.

2022-02

金井嘉彦

ガラス越しに見るジョイス. 言叢社.

2022-06

下楠昌哉, 須川いずみ, 田村章, 伊東栄志郎, 岩下いずみ, 岩田美喜, 小田井勝彦,
小野瀬宗一郎, 桐山恵子, 小島基洋, 新名桂子, 田多良俊樹, 中尾真理, 深谷公宣,
南谷奉良, 宮原駿, 横内一雄

百年目の『ユリシーズ』. 松籟社.

2022-02

ハーン

前田専學

ラフカディオ・ハーン: 源郷としてのインド. 春秋社.

2021-10

ベケット

宇野邦一

ベケットのほうへ、五柳書院、

2021-12

岡室美奈子、長島確、木内久美子、久米宗隆、鈴木哲平訳

新訳ベケット戯曲全集 3: フィルム・映画・ラジオ・テレビ作品集、白水社、

2022-01

< 研究論文、研究ノート >

イエイツ

高橋優季

W. B. Yeats and the Coinage of Irish Free State : The Emblem Search in Tradition and Modern. 小樽商科大学人文研究 142, pp. 1-28.

2021-12

高橋優季

刺繍となった詩：W.B. イェイツの作品にみられる変化、言語センター広報 30, pp. 57-66.

2022-02

高橋優季

William Butler Yeats and Phoebe Anna Traquair : "The Drama of the Soul" Embroidered in Scotland. 小樽商科大学人文研究 143, pp. 51-72.

2022-03

中尾まさみ

"The Friends that Cannot Sup with Us" : Rereading the Elegies of Yeats and Heaney. Odysseus: 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要 26, pp. 27-44.

2022-03

エリオット

齋藤純一

Teaching T. S. Eliot's poems to Japanese students. 国際経営論集 63, pp. 47- 54.

2022-03

佐伯恵子

Djuna Barnes, *Nightwood* の 2 つの世界 : T. S. Eliot の「序文」の効用 . 英文学論叢 065, pp. 29-50.

2021-12

瀬古潤一

詩人探偵の系譜を受け継ぐ T・S・エリオット . 関東学院教養論集 32, pp. 13-30.

2022-01

オーデン

辻昌宏

W. H. オーデン、イシャーウッドの中国旅行と思想的・宗教的転回 . 明治大学人文科学研究所紀要 88, pp. 117-133.

2021-03

グレゴリー夫人

海老澤邦江

「生」か「死」か、グレゴリー夫人の『グローニア』の選択 . 江戸川大学紀要 32, pp. 237-248.

2022-03

ジョイス

大島由紀夫

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』第 1 部第 4 章の概要 (75.1 ~ 103.11). 東京海洋大学研究報告 18, pp. 75-92.

2022-02

小林広直

How James Joyce Recycles Popular Culture: References and Nods to Thomas Moore in "An Encounter" and "The Dead". 東洋学園大学紀要 30, pp. 37-49.

2022-02

楚輪松人

ジョイスと読み解くリチャード・ハミルトンの《祖国アイルランド》：“ポップアートの父”と深読みする『ユリシーズ』. 金城学院大学論集人文科学編 19 (1), pp. 50-106.

2022-09

西村則昭

ラカンのジョイス論と道元の「身心脱落」. 宗教研究, 日本宗教学会編 96(1), pp. 1-24.

2022-06

真船均

An Encounter with the Void: Epiphanic Closure in James Joyce's *Dubliners*. 試論 55, pp. 23-38.

2022-01

モートソン, ダレン・ダグラス

"O Frances": Frances Boldereff's Readings of Joyce and *Finnegans Wake* (Part Two). 目白大学人文学研究 18, pp. 31-43.

2022-03

スウィフト

加藤千博

『ガリヴァー旅行記』に見られるエコロジー観 ―諷刺とユートピア文学作品の観点から―. 英米文化 52 (0), p. 1-22.

2022-03

山内暁彦

原民喜『ガリバー旅行記』の「アンボニア」と「ヤーフ」について. 言語文化研究 29, pp. 1-38.

2021-12

パウンド

上野葉子

詩篇の翻訳『詩篇』第8篇・Ezra Pound Review, 日本エズラ・パウンド協会編 24, pp. 87-105. 2022-02

遠藤朋之

The Relation of "Ez Po" and "Kit Kat," and How Shuri Kido Appears.
Ezra Pound Review, 日本エズラ・パウンド協会編 24, pp. 21-37. 2022-02

来馬哲平

They Are Not Merely Separate Subjects: A Spicerian Examination of *Guide to Kulchur*. Ezra Pound Review, 日本エズラ・パウンド協会編 24, pp. 1-19. 2022-02

橘真紀

パウンドの水の詩学・英語学英米文学論集 48, pp. 1-13. 2022-05

原成吉

詩篇の翻訳『詩篇』第4篇・Ezra Pound Review, 日本エズラ・パウンド協会編 24, pp. 75-86. 2022-02

山口均

「落花枝にかへると見れば胡蝶哉」考・Ezra Pound Review, 日本エズラ・パウンド協会編 24, pp. 57-73. 2022-02

山中章子

Searching for a "Ball of Light?" : Ezra Pound's *Guide to Kulchur* and Gary Snyder's *The Great Clod*. Ezra Pound Review, 日本エズラ・パウンド協会編 24, pp. 39-55. 2022-02

吉武信彦

ノーベル賞の国際政治学：ノーベル文学賞と日本、西脇順三郎をめぐる推薦と
選考 1958~1968 年，地域政策研究，高崎経済大学地域政策学会編 24 (4), pp. 1-23.
2022-03

ハーン

池田志郎

Re-Reading “The Legend of Yurei-Daki” by Lafcadio Hearn. Soseki
and Hearn Studies3, pp. 17-27. 2022-03

郭瀟穎

ラフカディオ・ハーンの中国理解：中国人の宗教信仰を中心に，地球社会統合
科学 28 (2), pp. 1-15. 2022-01

郭瀟穎

ラフカディオ・ハーン『中国怪談集』所収「大鐘の霊」成立考：中国古典を軸
としたその伝播経路に関する新発見，比較文化研究 148, pp. 207-218. 2022-07

風早悟史

ラフカディオ・ハーン「英語教師の日記から」の邦訳における多言語性の顕在
化，山陽小野田市立山口東京理科大学紀要 5, pp. 59-66. 2022-03

黒柳大造

野口米次郎とハーン (7) 「Lafcadio Hearn in Japan」第五章について (1). 八雲
34, pp. 1-6. 2022-

先川暢郎

ハーンとスピリチュアリズム，拓殖大学語学研究 146, pp. 101-135. 2022-03

西川盛雄

Lafcadio Hearn as a Journalist. Soseki and Hearn Studies3, pp. 7-16. 2022-03

牧野陽子

<エッセイ> 春の色, 春の想い:『ひまわり』とハーンの嵩山伝説. 成城大学経済研究 234, pp. 273-280. 2021-12

牧野陽子

Scenes of Temples and Shrines: The Religious Sensibility of the Japanese People as Seen by Lafcadio Hearn. 成城大学社会イノベーション研究 18 (1), pp. 87-93. 2022-10

アラン・ローゼン

Lafcadio Hearn and Medical Science. 熊本大学五高記念館館報 4, pp. 103-115.

2022-03

ロレンス

大山美代

Mansfield's Bliss and Lawrence's Anguish : Modernist Experiments in Verbalising Uncontrollable Feelings. 広島修大論 63 (1), pp. 23-34. 2022-09

加藤彩雪

D. H. ロレンスの「やさしい」個人主義: 人間・自然・動物との関係をめぐって
大妻比較文化, 大妻女子大学比較文化学部紀要 23, pp. 35-47. 2022-03

エドワード・ガーネット著, 近藤康裕訳

藝術と道徳家: D・H・ロレンス氏の作品. 教養論叢 143, pp. 326 (13)-338 (1).

2022-02

ワイルド

小野章, S. カビール・ラッセル, 中原瑞公

高等学校英語教育におけるリーディングの指導: オスカー・ワイルド作
The Selfish Giant を題材として. 学校教育実践学研究 28, pp. 31-36. 2022-03

佐藤史子

Oscar Wilde's Arguments about Japanese Designs. 経営論集, 大東文化大学経営学会編 (42・43), pp. 37-47. 2022-03

深澤清

形成期の Oscar Wilde: Ruskinism から Oscarism へ. 英米文学語学研究会論集 19, pp. 19-30. 2021-12

その他

巽孝之

日英モダニズムの果実. 学術の動向 26 (4), pp. 448-452. 2021-04

西谷茉莉子

ジョン・モンタギューがアルスター詩の伝統創造に必要としたもの:
“Global Regionalist” としての試み. エール: アイルランド研究 40, pp. 130-132. 2021-03

畑中杏美

彼女の記憶の記録: William Trevor, “Matilda” s England” における老いの意識.
弘前大学人文社会科学部 10, pp. 93-111. 2021-02

日本イエイツ協会
2020 年度会計報告書
(2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日)

収 入		支 出	
前年度繰越金	1,335,301 円	第 56 回大会経費	0 円
会費	384,000 円	(総会のためのオンライン開催)	
利子	13 円	通信費	13,860 円
		事務局経費	11,748 円
		HP 管理維持費	10,490 円
		(送金料金込み)	
		学術誌印刷代*	390,830 円
		(『イエイツ研究』第 50、51 号)	
計	1,719,314 円	計	426,928 円

*『イエイツ研究』第 50 号は支払いが 2020 年 4 月になったため、
2020 年度会計で処理しました。

収支差額	1,292,386 円
------	-------------

次年度繰越金	1,292,386 円
--------	-------------

会 計 伊 東 裕 起

以上の会計報告が正当であることを確認します。

2021 年 10 月 31 日

監 事 三 好 み ゆ き 
監 事 中 村 床 本 衣 子 

日本イエイツ協会 第57回大会プログラム

2021年11月14日(日)

会場：オンライン

10:00-10:15 挨拶

日本イエイツ協会会長 佐藤 容子
駐日アイルランド大使館代表
司会 池田 寛子

10:15-10:45 研究発表1「亡霊を呼び起こしたものは何か
—『骨の夢』における若者の祈りについて—

伊東 裕起
司会 萩原 真一

10:45-11:15 研究発表2「風の詩学
—斬首における不在と表象のアポリアー—

石川 隆士
司会 岩田 美喜

11:15-11:25 休憩

* * *

11:25-12:30 特別講演
「イエイツを追いかけて
—アイルランド文学研究と国際交流—」

講師 大野 光子
司会 佐藤 容子

12:30-13:30 総会+昼食

司会 伊達 直之

13:30-16:00 シンポジウム「イエイツ詩の価値を問い直す
—詩人と続く世代との対話を手がかりに—」

司会・講師 西谷茉莉子
講師 中尾まさみ
講師 柿原 妙子
講師 山内正太郎

16:00 閉会の辞

事務局長 池田 寛子

編集後記

二度目の編集委員長を二期四年務め終えました。申し送りたいのは *thesis statement* を忘れないで下さい、の一言です。前号の編集後記にも記しましたが、要するに、先行研究の中に自らの問いを位置付けて、その狙い、その価値を明示する、あわせて自分なりに確かな根拠に基づいて仮の答えを提示する。そのような内容を序論部に含めて下さい、ということです。

査読は、新規性、構成力、信頼度の三点をもって行われるのですが、たとえば論考と先行研究との関係性が示されないようでは新規性や信頼度に疑念を生じさせますし、問いと答えが論考の中ほどまで明らかにされないような文章は、論文の構成としていかがなものか、と思わせます。しかし、*thesis statement* に留意しているとそのようなことにはならない。*Thesis statement* は四番目の査読ポイントとして唐突に持ち出したものではなくて、欧米では、すべての学術分野における議論の基礎として、高等教育機関の言語教育に普通に組み込まれているものです。こんなサイトまで用意されています。<https://writingcenter.uagc.edu/thesis-generator> 論考が国際的にまっとうな論説文たり得ているかを確認できる、いわば非常に便利なツールです。活用していただくことを願っています。

書誌に関しては、これまでアイルランド文学研究、それもわずかの例外を除いて亡くなって久しい作家の研究の範囲にとどめていたものを、イエイツ研究関連に拡大しました。その結果、年月を少しさかのぼって収めたものもあります。そのようにまとめていると改めて気づいたことは、イエイツに関する論考が少ないということです。『イエイツ研究』への投稿だけではなく、そもそも多く書かれていません。2022 年は『ユリシーズ』発刊 100 周年でした。ジョイス関連の業績がうずたかくなっているのは特別のこととしても、他と比べてかなり寂しい状況です。

ただし、海外に目を向ければ、イエイツ研究が廃れた、とは言えません。さまざまな学の領域と絡んで、むしろ盛況です。たとえば、2020 年 9 月に Seán Golden 編、*Yeats and Asia* という出版がなされました。これからアジアがらみで、すなわち日本がらみでイエイツを論じるなら、とりあえず目を通さねばならない書物です。このように、彼は、世界史の大変動期に長く最前線で詩作し続けた人です。アプローチは多様にあり得ます。今お考えのそのことを、ぜひ論考にまとめていただきたいと思います。

(編集委員長 谷川冬二)

『イエイツ研究』投稿規定

【資格】 投稿者は日本イエイツ協会会員であることを原則とする。

【執筆要領】

1 原稿について

- 1) W. B. イエイツとその周辺の文学に関する未発表のものとする。ただし、日本イエイツ協会の大会などにおける口頭発表を原稿とした場合、その旨注記すれば可とする。
- 2) 和文の場合は横書きとし、1行40字×30行で設定したものを1頁として換算した上で、「論文」は「13頁+10行」以内（必ず300語程度の英文シノプシスを添える）、「研究ノート」は「3頁+10行」以内、「書評」は「2頁+20行」以内とする。また大会におけるシンポジウム／ワークショップの「報告」ならびに「研究発表要旨」の提出を「2頁+20行」以内で求める。いずれの場合も、注および改行や引用等によって生じるスペースも制限頁内に含めることとする。
- 3) 和文の場合、英文の題名およびローマ字書きの投稿者名を添える。
- 4) 英文の場合、論文は注を含めて6,000語以内とする。シノプシスは不要。
- 5) 英語を母語としない投稿者の英文シノプシスおよび英語の論文については、投稿前にネイティブ・スピーカーによる原稿のチェックを受けることが望ましい。
- 6) 原稿はすべてMS Word ファイル形式あるいはリッチテキスト形式で保存し、電子メール添付として提出する。フォントは、原則としてMS 明朝を使用すること。数字は半角を使用すること。

2 書式について

- 1) 和文原稿の句読点は、読点（、）と句点（。）を用いる。
- 2) 年号表記はできるだけ西暦に統一し、元号を併記する場合は下記の通りとする。

〔例〕 2001年（平成13年）

- 3) 外国の人名、地名、書名等は、原則として初出の際は原語で表記する。

- 4) 引用文はかぎカッコ「 」でくくる。3行以上にわたる長文の場合は、本文より左1字インデントし、引用文の上下を1行ずつ空ける。
- 5) 作品（詩および散文）の引用はすべて英語とする。ただし、外国の研究書の引用は日本語訳とする。
- 6) 英文表記は、原則として *MLA Style Manual and Guide to Scholarly Publishing* あるいは『MLA 英語論文の手引き』（最新版）に基づくものとする。
- 7) 注（引用文献を含む）は本文中に算用数字で表記し、本文の最後に通し番号でまとめる。注番号には括弧を使用しない。
- 8) 図版を使用する場合、その取り扱い編集委員会の裁量に従うこととする。

3 校正について

- 1) 執筆者の校正は初校までとする。
- 2) 校正段階での大幅な訂正・書き換えは、原則として認められない。完成原稿で提出するものとする。

4 著作権について

- 1) 『イエイツ研究』第45号以降に掲載された論文等の著作権は、日本イエイツ協会に帰属するものとする。
- 2) 掲載された論文等を電子化して公開する権利は、日本イエイツ協会が有するものとする。
- 3) 掲載された論文等について、著者自身による研究・教育・成果普及等での利用（著者自身による編集著作物への転載・掲載、インターネットを通じての一般公開、複写して配布等を含む）を、日本イエイツ協会は無条件で許諾する。著者は同協会に許諾申請を行う必要がない。ただし、出典（論文誌名、号ページ、出版年）を記載しなければならない。

5 執筆者用抜刷について

掲載論文の執筆者用抜刷は10部単位で30部を上限とする。印刷代等は執筆者負担とする。

6 掲載号の進呈について

論文執筆者には5冊、研究ノートおよび書評執筆者には3冊、発表要旨の執

筆者には2冊、掲載号を配布する。

【締 切】 毎年5月末日

【提出先】 投稿する論文と研究ノートを電子メール添付で下記の2ヵ所宛に提出する。その際、氏名、現在の所属、連絡用の住所、電話番号、電子メールアドレスを明記すること。

日本イエイツ協会編集委員長 奥田 良二
ryoji.okuda@nifty.com

日本イエイツ協会事務局長 池田 寛子
ikedada.hiroko.2v@kyoto-u.ac.jp

日本イエイツ協会役員名簿 (2022 年度後期 - 2024 年度前期)

会長	浅井 雅志					
事務局長	池田 寛子					
会計	伊東 裕起					
編集委員長	奥田 良二					
編集委員	岩田 美喜	木原 誠	長谷川弘基	眞鍋 晶子		

理事 (50 音順)

浅井 雅志	池田 寛子	伊東 裕起	岩田 美喜	海老澤邦江
奥田 良二	木原 誠	小堀 隆司	佐藤 容子	諏訪 友亮
高橋 優季	伊達 直之	谷川 冬二	榎木 伸明	中尾まさみ
中村麻衣子	西谷茉莉子	萩原 眞一	眞鍋 晶子	三神 弘子
三好みゆき	山内正太郎			

ウェブ委員 伊東 裕起 山内正太郎

イエイツ研究 第 53 号

2023 年 2 月 28 日印刷 2023 年 2 月 28 日発行

発行者 佐藤 容子

発行所 日本イエイツ協会事務局
〒 606-8051 京都市左京区吉田二本松町
京都大学人間・環境学研究科 池田寛子研究室内

編集委員 谷川 冬二、岩田 美喜、木原 誠、眞鍋 晶子

印刷所 株式会社シンセイドウ
〒 230-0011 神奈川県横浜市鶴見区上末吉 1-13-15
TEL : 045-571-2761 / FAX : 045-571-6592

THE YEATS SOCIETY OF JAPAN

CONSTITUTION

1. The Society is to be called THE YEATS SOCIETY OF JAPAN.
2. It has as its objects the promotion of Yeats studies in Japan, and contact and cooperation with researchers abroad. The Society consists of the members who agree to its objects.
3. The Society has the following executives:
 - (1) President
 - (2) Committee
4. The President is to be appointed by the Committee, and the Committee is to be elected by the Society members.
5. The Society can have advisors by recommendation of the Committee.
6. The executives hold office for two years but may offer themselves for re-election.
7. The Committee supports the President to run the Society's affairs.
8. The Society is to undertake:
 - (1) an annual conference.
 - (2) lecture meetings.
 - (3) publication of members' work on Yeats.
 - (4) publication of the Society bulletin.
9. Expenses of the Society are to be defrayed from membership fees, grants, etc.
10. The regular membership fee is 7,000 yen per year. The student fee is 3,000 yen per year.
11. Membership in the Society requires a written application and payment of the stated fee.
12. The Society may have branches.
13. Any amendment or addition to this Constitution requires the approval of the Committee and sanction at the Annual General Meeting.

YEATS STUDIES

THE BULLETIN OF THE YEATS SOCIETY OF JAPAN

No.53 • 2022

Contents

Lecture:

Pursuing Yeats: Studies in Irish Literature and International Exchange

..... Mitsuko OHNO 3

Research Note:

From Music for Words to Words for Music Michiko HARADA 22

Symposium: Reconsidering the Values of Yeats's Poetry: Dialogue between the Poet and Later Generations

An Introductory Note for the Symposium Mariko NISHITANI 26

Reading Yeats's Poetry through MacNeice's *The Poetry of W. B. Yeats* Mariko NISHITANI 29

"The Friends that Cannot Sup with Us": the Elegies of Yeats and Heaney

..... Masami NAKAO 32

Margaret Atwood Reading Yeats Taeko KAKIHARA 36

Yeats's Poetry and Popular Culture: Cinema, Music, Manga, and Joke Shotaro YAMAUCHI 40

Japanese Synopses of the Orally Presented Papers:

What Evoked the Ghosts: On the Prayer of the Young Man in *The Dreaming of the Bones*

..... Yuki ITO 44

Poetics of the Wind: An Aporia of Absence and Re-presence in *une Vision Capitale*

..... Ryuji ISHIKAWA 46

Bibliography of Irish Literary Studies in Japan (Oct. 2021 – Sept. 2022) 49

Financial Report 57

Programme of the 57th Annual Conference 58

Editor's Note 59

Guidelines for Submission 61